

島上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7



1983

高槻市教育委員会

は　し　が　き

近年、迫る開発により消滅してゆく遺跡の中で、重要な意味をもつ調査が今年度も実施されました。嶋上郡衙跡を中心に、阿武山古墳、安満遺跡がそれにあたります。嶋上郡衙跡では芥川庵寺の中心域で、阿武山古墳は史跡指定を前提とした範囲確認調査を、そして史跡指定予定にともなう確認調査を安満遺跡でそれぞれ実施し、各々貴重な成果を積み重ねることができました。

特に、阿武山古墳は文化庁を中心に、大阪府・茨木市・高槻市の各教育委員会が調査した結果、故梅原末治先生が昭和9年に調査された結果を確認し、さらに新しい成果を得ました。その結果、昭和57年10月、国の史跡として答申がなされたことは、文化財保護の新たなる一步といえましょう。

一方、昨年度に引き続いて実施した安満遺跡の史跡指定予定にかかる調査は、3ヶ所の調査区について行い、2ヶ年にわたる確認調査を終えました。今回の調査結果も含め、これまでの成果を合せ考えるとき、より以上に安満遺跡の重要性を確認したと考えます。

ここに、今年度実施しました発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

高槻市教育委員会

社会教育課長 森 健一

例　　言

1. 本書は高槻市教育委員会が、国庫補助事業（総額12,000,000円）として計画し、調査を実施した高槻市所在、史跡・島上郡衙跡附寺跡周辺部及び郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也指導のもと、技術吏員大船孝弘・橋本久和・森田克行が担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和57年5月11日着手し、昭和58年3月31日事業を終了した。
3. 本書の作成にあたって、写真撮影は森田克行がおこない、遺物整理については、武村雅一・白銀良子・中井節子・宮崎康夫・藤本ゆかりの各氏に援助を得た。また三島高校教諭・徳丸始朗氏には、安満遺跡の花粉化石資料の分析結果を御報告いただいた。記して感謝の意を表します。
4. 調査の実施にあたり、服部恒・中村綾子・宝角宏志・阪口定男・中辻勘・古藤茂治・宮本正春・上野孝作・高槻市・京都大学・奈佐原財産区・大阪学院大学・茨木市教育委員会・丸大食品(株)などの援助をうけた。また本市文化財保護審議会委員原口正三氏には、調査全般について御指導いただいた。ここに記して感謝の意を表します。

目 次

I 鳴上郡衙跡	1
II 郡家今城遺跡	7
III 富田遺跡	8
IV 大藏司遺跡	9
V 上田部遺跡	11
VI 安満遺跡	12
VII 阿武山古墳	23
附 ま と め	25

鳴上郡衙跡他関連遺跡調査一覧

番	地 区	調 査 地	面 積	申 請 者
1	24-H・L 25-M・O・P	郡家新町291、294、295、299、300	320	高 橋 市
2	4 - I	郡家本町947、752-1、753	726.36	中村綾子、服部 恒
3	5 - E + F	郡家本町918	85.85	服 部 恒
4	郡 家 今 城	水室町1丁目779-9	101.64	宝 田 宏 志
5	富 田	富田町6丁目2728	237.49	阪 口 定 男
6	大 藏 司	大藏司3丁目207-8	169.39	中 辻 勲 治
7	"	大藏司2丁目121-4	308.73	古 藤 茂 治
8	"	大藏司2丁目305-1	332.04	宮 本 正 春
9	上 田 部	桃園町842-7	104.55	上 野 孝 作
10	安 滿	高垣町279-1	942.14	丸 大 食 品 K・K
11	"	八丁畷町	300.00	高 橋 市
12	阿 武 山	大字奈佐原	5883.00	"

鳴上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要

I 鳴上郡衙跡

1. 24-H・L, 25-M・O・P地区の調査

高槻市郡家新町291他にあたる。小字名は宮脇・高津と称し、位置としては東馬場との境界線に該当する。現状は水路であるが、このたび水路改修の目的で史跡の現状変更届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ発掘調査を実施した。

調査地は昨年度の24-D・H地区の水路改修に伴う調査地点の南側にあたり、神郡社までと、そこから東に向きを変えて府道・辻子下ノ口線と交差するところまでの総延長180mが対象になる。当該地は、芥川廃寺の東北部にあたるため、調査は慎重を期し、まず水路の堆積土を重機とダンプカーで排土し、その後人力で遺構面まで掘り下げておこなった。実施にあたっては、南北方向の水路部分をAトレントとし、神郡社周辺部をBトレント、東西方向の水路をCトレントとしておこな



挿図1 鳴上郡衙跡の調査位置図

った。

遺構 (図版第2・3・45・46・47)

Aトレンチの基本層序は耕土(0.1m)・床土(0.1m)・暗茶褐色土層〔上部遺物包含層〕(0.2~0.4m)、黒灰色粘質土層〔下部遺物包含層〕(0.1~0.3m)、地山となる。地山は北側が高く、中央部が低くなっている。そして、南側の神郡社近くになると、またわずかに高くなっている。遺物包含層のうち下層のものはトレンチ中程から南側の低くなつたところに厚く分布しており、弥生土器をはじめとして、須恵器・瓦などが含まれている。上部包含層については遺物はさほど多くない。検出した遺構は溝3本と方形の柱穴を含む若干のピットがある。溝のなかで、2本はトレンチの南寄りで2.6mの間隔をもって平行に検出されており、芥川庵寺の寺域を画す機能を有するものかも知れない。南側の溝1は幅1.6m、深さ0.2m、溝2は幅1m、深さ0.2mを測る。溝内からは唐草文軒平瓦をはじめとする瓦類が出土している。この2つの溝の方向性についてはN-9°30'~Wとなるが、狭小な範囲であるので、多少の誤差はあると思われる。ピットは、トレンチの南寄りで、溝の北側から検出したものがやまとまり、建物があったとみてよい。建物1の柱穴は1辺約0.6m前後の方形を呈し、柱間は約1.6mを測る。主軸の方位はN-40°~Wである。柱穴からは弥生土器と土師器が検出されているが、建物1としては7世紀以降のものと考えられる。

Bトレンチの基本層序は、上方の高さ(0.6~0.8m)を除けば、基本的にAトレンチと同じである。遺物は黒灰色粘土層よりも上層の整地層からかえって多く検出している。地山は標高17.6mを測る。遺構としてはピットのみで、20個を数える。なかには掘り方のしっかりした方形のものもあり、建物の存在は充分考えてよい。ピット内からは弥生土器が主に出土し、若干の土師器を含む。なお当該トレンチの東半分については、長さ10.5mを測る松の大木が埋置されていて、遺構は破壊されていた。この松の大木は長さ10.5m、根本の直径1.1mを測るもので先是二股になっている。埋置の時期については中世の遺物を含む包含層を切り込んでいることから近世以降のものであることは確かである。また古老によれば、この辺に松を埋置した記憶はないとのことであった。推考するに、近世初期における高櫻城築城の際、石垣下脚木組に供されるべき資材であるとすることはいかがなものであろうか。

Cトレンチの基本層序は耕土(0.1m)、床土(0.1m)、茶褐色土層〔上部遺物包含層〕(0~0.6m)、黒灰色粘質土層〔下部遺物包含層・沼層〕(0.3~0.7m)地山となる。地山は中央部西寄りで深く凹んでおり、遺構も中央部付近ではほとんどみられなかった。逆に西端部と東半部は地山がしっかりしており、遺構(柱穴と落ち込み)も検出している。とくに西端のやや高いところからは、一辺0.8m、深さ0.45mを測る方柱穴が複数検出されており、Bトレンチの情況と軌を一にしている。出土遺物は、7世紀~8世紀の須恵器・瓦片などが目立つ。

遺物 (図版第6~10)

調査範囲が狭いため、遺構に関連させて考えられる遺物は少なく、包含層から検出したものが多い。各トレンチから土師器・須恵器・瓦類がそれぞれ出土しているほか、少量の弥生土器はA・Bトレンチから検出され、すべて後期のものである。甕片19・21・23・25・26・35が多く、高杯片1・22・30がわずかにある。1は瓶形の杯部に大きく裾の広がる脚部がつくものである。杯部

は内外面とも丁寧にヘラミガキしている。脚部は外面上方をヘラ削りし、下半はヘラミガキを施す。内面は丁寧にナデ調整しており、中位にヘラ先によると思われる斜め放射状の線刻が多数みられる。後期末に位置づけられよう。土師器は布留式の壺片をはじめ、長胴壺 15・瓶片 27 があり、奈良時代に降る杯片なども検出している。また近世の樂焼の小皿片 33 や鍋片 32 も出土している。須恵器では杯・高杯・壺・翫・壺などが散見できるが量は多くない。時期的には、古墳時代後期から奈良時代にかけてあり、2・3 は 6 世紀後半に、8 は 7 世紀初頭に位置づけられる。また、備前焼の檻鉢底部片 37 や磁器皿 9 などが包含層から出土している。瓦類については当調査区が芥川廃寺の一画を含むことから、出土点数がもっとも多く、240 点を数え、その大半は B トレンチから出土している。軒平瓦は重弧文の 4 と均整唐草文の 5・6 の 2 種類がある。4 は瓦当の両端および下半が欠失しており、復すれば四重弧文になろう。凹面には細かな布目がみられる。胎土は良なるも軟質で、全体に風化がかなり進んでいる。色調は淡灰黄色を呈している。5・6 の瓦当文様は同じで、平城宮 6664 型式と同様のものである。いずれも凹面の布目を横方向にスリ消している。ところで平城宮、難波宮、吹田市七尾瓦窯の 6664 型式のものは段頭式であるのに対し、芥川廃寺のものはいずれも曲頭式になっていて、重要な知見となる。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈す。胎土も精良である。また瓦当面は欠失しているが、調整・質・色調ともに同じくする瓦片があり、これには凸面に横方向の繩叩目が認められる。軒平瓦の時期は、前者が白鳳時代、後者が奈良時代中葉になる。丸瓦・半瓦については表に示す如くに分けられる。このうち丸瓦は玉縁のものと行基のもの 47・51 に分けられるが、後者は極めて少ない。前者については凸面の調整により、3 つに分けられるが、それらは基本的に繩叩目をどの程度に調整するかに分類され、本来的には同一視すべきかもしれない。形状については大小あり、52 は厚さ 2.5 cm、56 は厚さ 1.0 cm と厚薄の差がある。また焼成も良好で硬質のものから軟質のものまで種々ある。なかでも胎土は個体差が甚しく、57 などは砂粒を多く含み他のものと区別でき練りも悪く破面は縞状になっている。当施寺跡の出土瓦では時期差と見做せる。また 54 は、凹面の布目に精粗の 2 種がみられ、布袋を補修した痕と思われる。境には綴じ紐の圧痕もついている。平瓦は製作技法の違いおよび叩き目の違いから少し細かく分けられた。製作技法では、桶巻づくりと一枚づくりに分けられるが、一枚づくりのものは

平瓦・丸瓦の分類と数量

平 瓦

成形法	凸面の調整	叩きの種類	A	B	C	計
桶巻造	スリ消し	格子目	2	2		
		繩目	1	6	7	
	不明	25	97	15	137	
一枚造	調整なし	繩目(繩)	7	29	2	38
		繩目(縛)	2	2		
繩目	—		11	11		

丸 瓦

尻部形状	凸面の調整	叩きの種類	A	B	C	計
玉縁	スリ消し	不明	4	20	6	30
		繩目	4			4
	調整なし	繩目	3			3
行基	スリ消し	不明	3			3

平瓦全体の6%に満たない。桶巻づくりのものは丸瓦同様、凸面の調整の度合によって一応分けられるが、叩きに格子目と綱目との2種がある。格子目は白鳳時代のそれと異なり、浅く幅広い界線によって画されているため、格子の1辺の長さは1.5～4mmと短く、細かな格子目となっている。また綱叩きは通常縦方向に施されるが、61・63のように横方向のものもある。スリ消しにおいても、普通横方向になされるが、60のように縦方向のものもある。横方向の綱叩きに対応するものであろう。凹面の布目については、これをなで消したものが、4点ほど認められた。11と12は桶巻づくりのうち復元できたもので、全長40.5cm、尻部幅24.3cm、同弧深4.9cm、厚さ2.0cmを測る。2点とも凸面は綱目叩きをスリ消している。凹面は布目で、11には布の縫合せ日がみられる。桶巻づくりのものは、全般的に灰色ないし淡褐色を呈し、胎土は良く硬質のものが多い。10は一枚づくりの平瓦で唯一復元できたもので、全長35.1cm、前部幅26.8cm、同弧深5.2cm、尻部幅23.5cm、同弧深4.7cm、厚さ1.6cmを測る。凸面は綱巻棒を転がしてつけた縦方向の綱目が全面にみられる。四周は軽くなっているが、側邊前方部には指紋を看取できる指痕が明瞭にみられる。凹面は布目をみると、特筆すべきは、前方左側にみられる『西寺』印である(7)。『西寺』印のある瓦は芥川廃寺跡において、これまでにも幾種類か検出されているが、平瓦の全形を知るものは、山城西寺跡出土瓦を含めても、はじめてである。この一枚づくりの平瓦はいずれも灰色ないし暗灰色を呈し、胎土に砂粒が多く含んでいる。以上瓦類をみたが、芥川廃寺創建時に關するものとしては重弧文軒平瓦の1点が確実なものとしてあげられる。均輪唐草文軒平瓦2点の瓦当型式については、平城宮第Ⅱ期に比定されている。丸瓦は前述のように57の1点を除いて、その色調・質・焼成等からほぼ奈良時代に該當するものと考えられ、一部白鳳時代に遡る可能性もある。平瓦については、一枚づくりのものが平安時代前期に屬することは『西寺』印からみて明らかである。他の平瓦は軒平瓦5・6と胎土・焼成・質・調査などが極似しており、おおむね奈良時代のものと考えられる。なお後者の平瓦については赤く変色したものが多く、丸瓦についても同様である。

小 結

今回の調査は芥川廃寺の一画にトレンチを設けるという恰好になったわけであるが、Aトレンチで検出した平行する溝やB・Cトレンチで検出した若干の方形ピットが当該時期の遺構として促えられるぐらいで、端的に寺であることを示す遺構は検出できなかった。ただ長大なトレンチを得た結果、地山の起伏を的確におさえることができ、神郡社周辺の限られた地域が周囲と比べて1段高くなっているのが知れ、大きな成果となるだろう。遺物は瓦が主であるが、その大半は奈良時代のもので、若干の平安朝のものを含んでいる。白鳳時代の瓦は、Cトレンチのピットから風化の進んだ軒平瓦を1点検出するのみで、当該時期の堂宇についてはより南に位置していたと考えられる。

芥川廃寺に関しては、これを船上郡衙に付随した郡寺とすることに異論はない。出土遺物から創建は白鳳時代になり、廃滅は平安時代後半に求められる。ここでは調査で得た知見をもとに、若干の予察をおこなう。一つは平城宮・難波宮の6664型式の軒平瓦と本廃寺の同型式の軒平瓦の頭の形状がまったく異なることであり、この時期の造営の屋瓦製作に際し、范の移動もしくは平城宮・難波宮において使用されなくなった後の製作が考えられる。もしそうだとすれば、奈良時代における本廃寺の造営年代は、後期難波宮造営以降、それも、平城Ⅲ期以後ということになろうか。ただ、

芥川廃寺出土瓦がどこで製作されたか不明なため、産地同定等の結果をもって改めて検討したい。いま一つは出土丸瓦・平瓦のうち、さきの 6664 型式に対応する時期のものなかに多くの羅刹瓦が含まれていることで、このことから奈良時代後半期に火災のあったことが知れるようになった。従来の所見では、奈良時代の造営前に火災のあったことがいわれていたが、これを後半に修正するだけでもよい、あるいは 2 度あったと考えるのかは即座に決し難い。つぎに平瓦では、平安時代のものが一枚づくりであるほかは、小破片で判別不可能なものを除いて、おむね桶巻づくりと考えられる。芥川廃寺の屋瓦が何處で焼かれたかはわからないが、近年の周辺地域の調査において、窯跡とおぼしきところを調査したが、現時点においてはそれらしき遺構・遺物を検出していない。伽藍復元とともに今後の芥川廃寺研究の課題になる。（森田）

2. 4-I 地区の調査

高槻市郡家本町 748 番地にあたり、小字名は西垣内と称する。現状は宅地である。

今回の調査は、北側の郡家本町遺跡と接する位置にあり、以前からの調査結果によって、遺構・遺物が希薄な地域であることが知られていた。また、調査トレンチの位置については、建物の基礎をそのまま再利用して倉庫を建てるため、届出地の中央部に設けることができず、南側の境界に接して東西 10 m、南北 1 m のトレンチを設定して実施した。地層の層序は、盛土（0.4 m）、暗茶褐色土層（0.2 m）、黄褐色疊層〔地山〕である。地層断面からは、古い時期の遺物包含層は確認されず、茶褐色土層からは近世瓦・磁器片が少量出土した。また、調査地が狭小なこともあって、地山面上から柱穴等の遺構をまったく検出することができなかった。（大船）

3. 5-E・F 地区の調査

高槻市郡家本町 752-1・753・9.47 番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、式内社・阿久刀神社の西方約 150 m に位置し、北を流れる芥川までの距離は約 50 m を測る。付近の地形を簡単に説明すると、南平台丘陵から西方に派生した平坦な尾根と、南側の低位段丘面とが接する位置にあり、屋根から段丘面には南緩斜面となってゆるやかに移行している。尾根と段丘面の比高差は約 5 m を測る。今回の調査地は、南斜面地のちょうど裾部にあたり、すぐ南側の地区では、昭和 56 年 5 月に調査がおこなわれ、弥生時代後期後半の堅穴住居址 2 棟・溝 2 条・土塙等が検出されている。また、調査地の南方約 100 m の地区では、古墳時代後期の堅穴住居群と奈良時代の掘立柱倉庫群が発見されて検出されている。このように史跡指定地の北側一帯には、各時代の遺構が濃密に分布しており、嶋上郡街・芥川廃寺の立地を考える上で重要な地区となっている。

遺構（図版 4・5・48）

調査地の現状は、傾斜地を宅地化するために相当厚い盛土がおこなわれていた。そこで、調査は重機を使用して、盛土を東西に反転しておこなった。西調査区の主な層序は、盛土（0.2 ~ 0.5 m）、暗茶褐色土層（0.1 ~ 0.8 m）〔遺物包含層〕、黄褐色疊層〔地山〕である。調査区の地山面には、

北西部が一番高く標高は23.3mを測り、東南部との比高差は約1.8mである。地山面の状態は、調査区の中央部北寄りに比高差約0.3~0.5mの東西方向に走る段があり、数値でみるとほど急角度の傾斜面を呈していない。

東調査区で検出した遺構は、掘立柱建物跡、溝1条と多数の土壙・柱穴等である。建物1は、調査区の北西部で検出したもので、建物の北側は調査区域外にある。規模は3間(柱間1.9m)×2間以上(柱間1.8m)で、柱の主軸方向はN-20°-Eである。柱穴の掘り方は他の建物のものと比べて大きく、ほぼ正方形を呈し、一辺1~1.4m、深さ0.6m前後を測る。埋土は暗褐色~茶褐色土層であり、出土遺物は少ない。建物2は、建物1と重複して検出したもので、建物の北側は調査区域外にある。規模は2間(柱間1.85m)×2間以上(柱間1.9m)で、主軸方向は建物1と同じくN-20°-Wである。柱穴の掘り方は、長方形と円形に近いものがあり、一辺0.6~0.9m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は暗褐色土層であり、出土遺物は全体的に少なく、須恵器の細片が少量ある。建物3は、調査区の北側中央部で検出したもので、建物の北側は調査区域外にある。規模は2間(柱間1.85m)×2間以上(柱間約1.8m)で、主軸方向はN-12°-Wである。柱穴の掘り方は、長方形のしっかりしたもので、一辺0.7~1m、深さ0.3m前後を測る。埋土は暗褐色土層であり、出土遺物は全体的に少ない。建物4は、建物3と重複して検出したもので、建物の北側は調査区域外にある。規模は2間(柱間2.3m)×1間以上で、柱列などから見て南側に庇をもつ構造のものと推測される。建物の主軸方向はN-14°-Wである。柱穴の掘り方は、庇の柱穴を除くと長方形の大きなもので、一辺1~1.8m・深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色土層であり、出土遺物は全体的に少ないが、南東隅の柱穴から漢式系土器片とフイゴの羽口片が出土している。建物5は、調査区の中央部で検出したもので、規模は2間(柱間2m)×3間(柱間2m)である。主軸の方向はN-0°-Eである。柱穴の掘り方は、方形の小さなもので、一辺0.3~0.3m、深さ0.4mを測る。埋土は暗褐色土層であり、出土遺物は全体的に少ない。なお、建物5の周辺部からは、大小多数の柱穴を検出したが、調査区が限られたため、明確な建物配置を確認することができなかった。また、柱穴内から出土する遺物の傾向としては、掘り方が小さく円形のものから瓦器片が認められ、奈良時代の建物群と重複して中世の建物群が建っていたことが考えられる。溝1は、調査区の南西部で検出した南北流する溝で、断面は浅いU字形を呈し、上辺1.5m、底辺0.8m、深さ0.3mを測る。堆積土は暗褐色土層が一層だけであり、出土遺物も全体的に少なく、奈良時代の須恵器・土師器が少量ある。

東調査区の主な層序は、盛土(1.8m)、旧耕土(0.2m)、床土(0.1m)、黒褐色土層(0.1~0.3m)[遺物包含層]、黄褐色疊土層[地山]である。地山面の状態はほとんど平坦で、北西部で標高21m、南東部で標高20.5mを測る。

検出した遺構は、井戸1基と大小多数の柱穴がある。井戸は調査区の北東部で検出したもので、上部径1.9m、底部径1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色土層であり、底部から石組に使用されたと考えられる人頭大の礫数十個が出土した。井戸内から出土遺物は、須恵器・土師器片が少數あるが、完形品に復元できたものは少ない。井戸の周辺で検出した柱穴群は、西側に分布する大きな柱穴群と、北側に密集して分布する小さな柱穴群とに分けることができる。両柱穴群から出土

遺物は少なく、正確な時期を決定することができなかったが、西調査区の柱穴出土遺物などからみて、大きな柱穴群は奈良時代のものに、小さな柱穴群は中世の時期に推定することができる。なお、建物の配置等については、調査地が水田の開墾等によって削平を受けていることと調査地の範囲が限られたことから、明らかにすることはできなかった。

遺 物（図版第 11～14）

今回の出土遺物は、遺構の検出状態と調査面積に比べるときわめて少ない。しかも、出土した遺物の大半が、柱穴および包含層からのものであって、細片のものが多く、完形品に復元できたものは少ない。出土遺物を時期別にみると、弥生時代後期後半の叩き目をもつ特徴的な壺片は、わずかであるが調査区の全域から出土している。その他の器種としては、高杯（23・24）、壺（25）等が若干ある。古墳時代の遺物としては、西調査区の南側の柱穴から出土した杯身（3）の他、須恵器の高杯・壺腹片が同じく柱穴から若干出土している。時期は6世紀末から7世紀中頃にかけてのものが中心である。その他、特徴ある遺物としては、建物4の南東隅の柱穴から出土した漢式系土器片（22）とフイゴの羽口片（17～21）がある。22は外反する口縁部を持つ壺で、外面に荒い平行叩き目を施し、内面は丁寧になでてある。外面にはススの付着が認められる。胎土は精良な粘土が使用され、暗褐色を呈する。フイゴはいずれも小さく破損しており、全容を知ることができないが、すべての破片に高温で焼けただれた部分が認められることから、先端部に近いところであったことがわかる。

歴史時代の遺物としては、柱穴・溝1・包含層中から出土した須恵器・土師器片が少量ある。土師器の杯（4）・壺（5）・羽釜（6）と須恵器の杯（7）は、建物5の中央部の柱穴から一括で出土したもので、奈良時代の土器として良く特徴を有している。その他の器種としては、土師器の杯（8・9・14）・壺・かまど・須恵器の蓋杯（10・12）・短頸壺の蓋（11）・広口壺・壺等がある。時期としては8世紀代が中心であるが、9世紀まで下るものも若干認められる。中世の遺物としては、小さな柱穴と包含層中から若干出土している。器種としては、瓦器の（16）・三足の羽釜（37・40）・土師器の皿（15・38）・須恵器の鉢（41）・壺（44）の他、磁器片（42・43）等がある。時期としては、14世紀の初頭頃を中心として考えられる。（大船）

Ⅱ 郡家今城遺跡

4. 郡家今城遺跡の調査

高槻市水室町1丁目779の1番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、本道跡の西端に位置しており、すぐ西側を女瀬川が南流し、すぐ北側を西国街道（旧山陽道）が東西に走っている。調査は届出地の北西部に東西2m、南北2mのトレントを設け、人力で掘り下げをおこなった。層序は盛土（0.6m）、旧耕土（0.2m）、暗青灰色～暗黄褐色砂質土層（0.3m）、黄褐色粘土～砂質土層〔地山〕となり、遺物包含層は認められなかった。遺構は北西部で径0.3m、深さ0.3mの柱穴1個を検出したが、埋土は灰褐色

色土層であり、掘り込みも耕土直下であることから、奈良・平安時代よりも比較的新しいものであると考えられる。柱穴からの出土遺物もまったく認めることができなかった。（大船）

Ⅲ 富田遺跡

5. 富田遺跡の調査

高槻市富田町6丁目2728番地あたり、小字名は西富田町と称する。現状は宅地である。富田遺跡は、富田疊層と呼ばれている低位段丘の先端部に立地しており、南側と東側が沖積地に移行する緩斜面地になっている。標高は約8~13mを測る。遺跡の規模は、これまで10数次の調査によって、普門寺を中心として東西約300m、南北約350mの範囲が推定されている。これまで検出された遺構は、弥生時代後期後半から江戸時代までのものが、重複して連續と形成されており、富田地区を代表する複合遺跡である。



挿図2 郡家今城遺跡の調査位置図



挿図3 富田遺跡の調査位置図

今回の調査地は、普門寺の南方約170mにあたり、富田遺跡の範囲内ではほぼ中央部に位置している。調査は届出地の中央部と東南部に2m角のトレンチを2ヶ所設定して実施した。地層の層序は、中央部のトレンチが暗褐色土層(0.3~0.5m)、黄褐色疊層〔地山〕であり、地山面では攪乱による凹凸が著しく認められた。東南部のトレンチでは、灰褐色土層(0.1m)、黒色土層(0.15)、黄褐色砂疊層〔地山〕となるが、地山面の攪乱は認められなかった。遺物は中央部のトレンチの暗

褐色土層から、多量の近世瓦・磁器・陶器片が出土した以外、まったく他の遺物は出土しなかった。また、造構についても遺跡の中心地に近い場所にもかかわらず、まったく検出することができなかった。調査地の地形は、小さな南向きの谷になっており、ちょうど西斜面中腹部に位置することから、古い時期の宅地造成によって、地山面が削平され造構が消滅した可能性が強い。（大船）

IV 大藏司 遺跡

6. 大藏司遺跡の調査

高槻市大藏司3丁目207の8番地にあたり、小字名は二黒と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、届出地の面積が狭く盛土が厚いため、全体を掘ることができず、建物の基礎部分についてのみ、断面地層の観察をおこなった。地層の層序は、盛土（1.2m）、旧耕土（0.2m）、床土（0.1m）、暗灰色砂疊層〔地山〕となり、調査地内では遺物包含層を認めることができなかった。また、調査トレンチが狭小なこともあって、造構等もまったく検出することができなかった。

（大船）

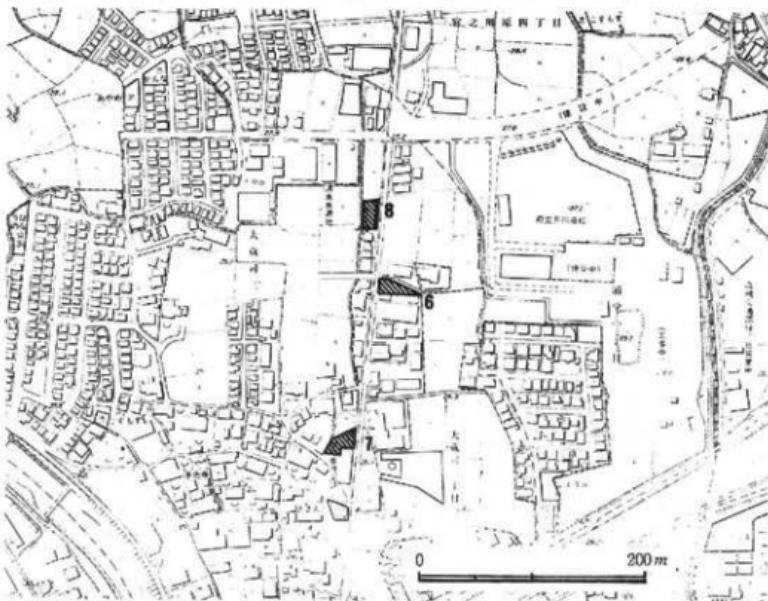


図4 大藏司遺跡の調査位置図

7. 大藏司遺跡の調査

高槻市大藏司2丁目121の4にあたり、小字名は神名と称する。当該地の東側一帯は弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落跡・水田跡等が検出されており、北側に隣接する地区からも堅穴式住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

調査は届出地に幅2m、長さ6mの試掘場を設定しておこなった。層序は盛土(0.8m)・耕土(0.2m)・淡褐色土(0.1m)と堆積し、その下層は厚い黄色土となり、遺構・遺物は検出されなかった。東側では淡褐色土に相当する層から多量の弥生土器等が検出されているが、当該地付近から南にかけては遺構・遺物がかなり疎になるようである。(橋本)

8. 大藏司遺跡の調査

高槻市大藏司2丁目305の1にあたり、小字名は辻堂と称する。当該地の周辺では、以前から弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。

調査は届出地の中央に幅2m、長さ10mの試掘場を設定しておこなった。約1mの盛土下に、耕土(0.2m)・黄褐色土(0.3~0.4m)と堆積し、その下層はこぶし大の石を混じえた青灰色砂礫が厚く堆積していた。どの層からも遺構・遺物は検出されなかった。(橋本)

V 上田部遺跡

9. 上田部遺跡の調査

高槻市桃園町842の7にあたり、小字名は惣行である。市庁舎駐車場のすぐ東側の位置にあたり、市庁舎建設時には奈良時代の集落跡の一部が発見されている。昨年度も、市庁舎北側の阪急高架工事に伴なう調査を実施し、各時期の遺物が採集されている。

遺構(図版第14・39)

調査区が狭小なため、南北約10m、東西約2mの試掘場を設け、遺構・遺物の検出につとめた。約0.7mの盛土を除去すると、耕土(0.1~0.2m)・床土(0.1m)が検出された。床土下に約0.2mの黄灰色土が堆積し、中世の遺物が若干含まれていた。この層の途中に青灰色土の堆積する小溝が断面で検出されたほかは、遺構は検出できなかった。黄灰色土の下層は0.1~0.2mの褐色土が堆積し、南側ほど厚くなっていた。この層には、奈良時代を中心とする遺物が含まれていた。その下層は0.2~0.3mの砂疊を含む青灰色粘土が堆積し、やはり奈良時代の遺物が含まれており、それ以前のものもみられた。青灰色粘土の上面から東西方向に流れる幅1~2mの溝があったが、溝内からは遺物は検出されなかった。地山は青灰色砂疊で、土壤・柱穴が検出された。土壤は長さ約1.7m・幅1m・深さ約0.3mを測り、堆積土は上層が0.2mの青灰色粘土で奈良時代の土器が含まれている。下層は約0.1mの暗灰色粘土で遺物は検出されず、小枝とみられる腐蝕物がかなり混じっていた。柱穴は4個検出されたが、まとめは判らない。

遺物(図版第15)

遺物は主に、褐色土と青灰色粘土から出土している。両層の遺物は共通しているので、特に区別しないで記述する。土壤1からは、少量の土師器破片が出土した。特徴的な杯(2)をみると、内面をていねいにナデて仕上げ、外表面は底部から口縁部にかけてていねいなヘラ削りをほどこしている。褐色土と青灰色粘土からは弥生土器・土師器・須恵器・縁船陶器・製塙土器・ふいご・瓦が出土している。弥生土器(15・16)はいずれも第V様式の縫底部とみられる。須恵器には古墳時代とみられる提瓶の口縁(17)・高杯(25)・杯(26)があり、杯は窓体に付いたまま出土した。他は、奈良時代を中心とみられ有高台の杯(24)や壺(27)などがある。土師器には、頭部以下を縦方向のハケ目調整で仕上げる奈良時代の壺(3~6)が目立ち、羽釜(7)もみられる。縁船陶器



插図5 上田部遺跡の調査位置図

(11~13)は、いずれも軟質の胎土に黄緑の釉が施され、蛇の目状の底部の碗(13)以外は器形が不明である。製塙土器は小破片(10)であるが、厚手で粗い砂粒が目立つ。ふいごの破片(8・9)は2点出土している。瓦は凸面に縄目を、凹面に布目痕がみられる平瓦(14)である。狭小な調査区にもかかわらず、綠釉陶器や製塙土器、さらにふいごの破片までが検出された。市庁舎建設時に多量の木製品や天平七年銘の木簡が出土するなど、上田部遺跡の性格は単なる奈良時代の一集落ではなく、より重要な性格があるようである。(橋本)

VII 安満遺跡

10. 安満遺跡の調査

高槻市高垣町279の1にあたり、小字名は対島と称する。当該地の周辺は安満遺跡の東部にあたり、これまでにも弥生時代の方形周溝墓をはじめ、奈良時代以降の数多くの遺構・遺物が発見されている。

遺構(図版第16・17・50)

基本的な層序関係は盛土(0.4~0.5m)、耕土(0.2m)、床土(0.05m)、黄灰色土(0.1~0.15m)、褐色土(0.3~0.4m)、黄褐色砂質土(0.2~0.25m)とづき、地山は黄褐色の粘質土であるが、調査区の西南部では青灰色砂疊となっていた。遺物は、主に褐色土から出土し、弥生時代から中世のものまでみられる。褐色土を除去すると調査区東南部で溝と柱穴を検出した。この遺構面を除去すると、調査区全面に弥生時代の方形周溝墓、弥生時代ないし古墳時代の堅穴式住居跡、奈良時代とみられる掘立柱建物跡が検出された。

上層の遺構は柱穴が10個余りと幅0.5~0.6m、深さ0.1m程の東西方向の溝である。柱穴および溝内からは土師器、須恵器、瓦、製塙土器が出土しており、奈良時代とみられる。下層の遺構のうち、柱穴は上層と同時期にみられるが調査途中では確認できなかった。

方形周溝墓1は調査区の東南部で検出された。西側の周溝が完掘できただけであるが、調査区を部分的に拡張し、南東の隅部と東側の周溝を確かめることができた。規模は周溝内側で南北7m、東西7.5m、周溝の幅約2mを測る。北側には周溝が掘られないタイプである。周溝の深さは溝の中央部で0.2~0.3mを測り、東側の周溝底部から畿内第Ⅱ様式の壺の破片が検出され、構築時の



図6 安満遺跡の調査位置図

供獻土器とみられる。西側周溝から東南隅部にかけて、畿内第Ⅶ様式の土器が多量に検出された。完形に近いものも含まれているが、いずれも底部から遊離しており、投棄されたものとみられ、報告するの9地区・周溝墓A5-2と同じあり方を示している。(『安満遺跡発掘調査報告書-9地区の調査』 1977年)。

堅穴式住居跡1は調査区中央部で検出された。ややゆがんだ方形プランを呈しているが、各辺は4.4~4.6m、周壁のたちあがりは約0.2m、西側だけに幅0.3m、深さ0.3mの周溝がみられた。四隅に直径0.15~0.2m、深さ0.1~0.15mの柱穴がある。東側は地山を削って約0.1mの段差をつけてベッド状としている。また、周溝と重複して一辺0.6mの方形掘り込みがあり、深さは床面から約0.3mである。中央部に薄い炭と燒土痕がみられ、床面に接して第Ⅶ様式と布留式の壺片などとともに、第Ⅶ様式の土器片が検出された。

掘立柱建物としてまとまるのは、方向が約4.5度西へ振り、柱間が1.5~1.6mで2間×2間の建物1と、約40度西へ振る建物2・3で柱間は約2.6mである。

遺 物(図版第18~26)

方形周溝墓1の溝内から出土したものと、褐色土から出土したものに分けられる。

方形周溝墓1の東側周溝から出土したものは(図版第21b)、口縁部に刻み目を入れ、波状文を施し、体部にも直線文と波状文を施し、肉厚な底部の第Ⅱ様式壺である。

溝内に投棄されたとみられる土器はいずれも第Ⅶ様式の土器である。壺には広口のもの(1~3、41~43)、長頸のものでは頸部が体部より長く、口縁部が外反し、外面に沈線を施すもの(4~47・48)と頸部が体部より短かいもの(5・7~8・51)がある。1の口縁部外而是凹線と円形浮文がみられ、2の口縁もヘラ描き沈線と円形浮文、体部にはヘラ描きの縮彫文と直線文を組み合わせている。6は頸部に把手の痕跡のある短頸壺で、外面を叩いてから、なでて仕上げている。11も壺とみられるが、外面に叩き目のこる大形である。また、壺には口縁部に列点文を施すもの(45・46)や体部に櫛彫文やヘラ先で1本の波状文を描くもの(49・52)もある。甕(10・64~73)はあまり復元できなかったが、受け口状を呈し、刻み目あるいは列点文を施すものもある(65・67~69)。高杯(12・55・57~63)、器台(53・54・56)、有孔鉢(74・75)も出土している。9地区的周溝墓A5-2の土器群と同じあり方を示している。

褐色土からは各時期の遺物が出土している。弥生土器(図版第22a)は主に中期のものであるが34が第Ⅲ様式、他はⅣ様式とみられる。

古墳時代の須恵器(図版第20・24a)には、蓋杯・壺・碗・高杯などがある。蓋杯では、蓋の口縁部と天井部の境に稜のあるもの(76)と無いもの(19)が、高杯では短脚のもの(84)と長脚一段、長脚二段のもの(81・82)がある。土師器には甕・壺・高杯があり、いずれも外面を細かい刷毛目調整をしている。甕では、13は口縁端がわずかに肥厚気味で底部も尖底状であるが、14の口縁には肥厚がみられず、まっすぐ外反している。甕は頸部が長手でわずかに外反する小形(15)である。高杯(18)は丸く内壁する杯部である。17は漢式土器の鍋とみられ、丸味のある体部に一对の把手が付く。淡褐色で、外面は格子状の叩きを施し、内面はていねいになでて仕上げている。土師器に比べかなり硬質である。

奈良時代の遺物には須恵器・土師器・瓦・製塙土器がある。須恵器は底部に高台の付く杯と、宝珠つまみの蓋のほかに、高台状のつまみのつく大形の蓋(21・83・85~87)がある。土師器の杯は底部未調整で内面と口縁をていねいになで仕上げるもの(23~26・96)と底部をヘラ削りするもの(95)がある。壺(96~99・102)はいずれも外面を縱方向の刷毛目で仕上げている。また、把手も出土している。壺の口縁とみられるもの(100・101)もある。16は球形に近い体部と外反する短い口縁部の広口の壺で、外面は刷毛目調整せずに、粘土紐の痕跡をのこす。内面は頸部以下をかるくヘラ削りしている。他遺跡の例ではこの種の土器にしばしば人面を描き、まじないに使用されている。瓦はいずれも内面に細かい布目痕がみられ、平瓦は外面に繩目痕があるが(88~96)、丸瓦では外面をなで仕上げている(92~94)。製塙土器は130片余り出土しているが、いずれも細片である。岡版第26aに口縁部を、26bに体部を主にまとめた。いわゆる粗製陶彈形といわれるもので、胎土は粗く、1ないし2mmの白色砂粒が混じり、赤味のある淡赤褐色あるいは白っぽい淡黄灰色である。内外面は指頭圧痕で仕上げ、内面に布目痕のあるもの(141)は極めて少ない。口縁部の復原可能なものでみると、22では約15cm、128では約20cm、129では約11cmである。口縁上端は内傾気味に薄く仕上げられ、上端から2~3cm下位の最厚部では1~1.5cmを測り、体部は薄く0.5~1cmを測るものが多い。130は口縁下位に縱方向の刷毛目がみられ、同質ではあるが、他の用途のものかもしれない。

平安時代以後の遺物も少ないが出土している(岡版第26b)。土師器小皿は、口縁の屈曲が強いもの(27・28・113~115)とまっすぐにおわるもの(114)がある。大皿もある(116)。瓦器椀(104~107・109~113)も厚手で内外面のみがきがていねいなものと、薄手でヘラみがきが省略されるものがある。土師器皿・瓦器椀とも11世紀から13世紀にかけてのものである。瓦器には土釜の口縁部と脚もある(106・117)。備前焼の鉢口縁部(103)も出土しているが口縁が大きく室町時代でも時期の降るものである。

今回の調査では、方形周溝墓群が從来より東北へも築かれていたことが確認でき、その時期も第Ⅱ様式期である。京大農場北側の確認調査でも方形周溝墓が検出されており、弥生時代の安満の集落と墓域がますます明らかになってきた。また、古墳時代の住居跡は初めて確認できたが、弥生時代後期から今回の調査区周辺を中心に集落が営まれたらしい。さらに、奈良時代には安満遺跡東部にはかなりの規模の集落が営まれたことは從来からの調査でも判明していたが、その範囲が北の方へも拡がっているようである。(標本)

11. 安満遺跡遺構確認調査

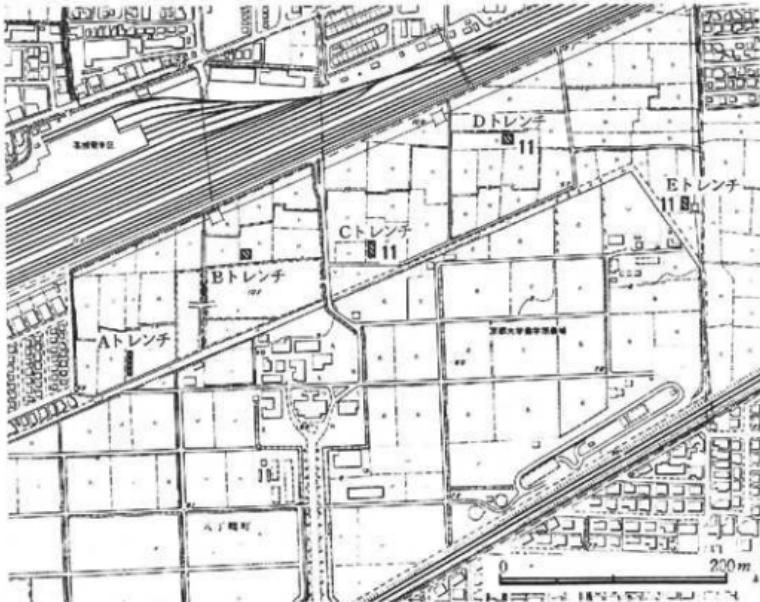
今回の発掘調査は、安満遺跡を史跡指定するためにおこなった遺構確認調査である。調査地および調査方法については、地元との協議によって、京大農場と国鉄に挟まれた水田地帯を大きく5ブロックに分け、各ブロックに約100mのトレンチを1ヶ所設け、2年計画で実施することになった。昨年度はまず西側に位置するA・Bブロックに設定した2ヶ所のトレンチを調査した。今年度は昨年度に引き続き、東側に位置するC・D・Eブロックのトレンチを調査した。

Cトレーニング(図版第27)

高槻市八丁畠町251-1番地にあたり、小字名は二ノ上と称する。京大農場事務所から北東方約160mのところにあたる。トレーニングは、東西辺7m、南北辺14mの細長いものを設けた。主な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.3m)、黄茶褐色土層(0.1~0.3m)、暗褐色土層(0.2m)、黄灰色砂質土層[地山]である。地山面下の層序は、0.4mまでは暗灰色~黒色粘土がほぼ水平に互層となって堆積し、グライ土壤化していた。これらの粘土中には、ヨシ・アン類の根茎・葉等が薄い層となって何層にも堆積しており、かつて湿地帯であったことがわかる。

遺構

遺構は、トレーニングの中央部から北側にかけて、溝2条、土壙1基と大小の柱穴等がある。地山面は、北東から南西方向にゆるやかに傾斜している。溝1は中央部北寄りで検出した細長い土壙状のもので、規模は幅2.5m、深さ1mを測る。堆積土は3層に分けられ、上層からは、5世紀前半の土師器片が少量出土した他、下層からは弥生時代中期の土器・石器が出土している。溝2は北側で検出したもので、大部分は調査区域外にある。深さは0.1mと浅く、堆積土層は茶褐色土層であり、遺物は認められなかった。土壙は、溝1の北側で検出したもので、隅丸長方形を呈する。規模は短辺1m、長辺1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色土層であり、遺物は認められなかった。柱穴は径0.15~0.4mの円形のもので、深さは0.05~0.3mを測る。埋土は土壙と同様に茶褐色層



挿図7 安満遺跡の調査位置図

であり、遺物もまったく認められなかった。

遺 物（図版第30-1、31-b）

検出した遺物は非常に少なく、東西溝の上層から出土した土師器片と下層から出土した石器類がある。土師器片の大部分は小さな破片であって、完形品に復元できたものは高杯（1）のみである。その他の器種としては、壺・甕などがある。高杯は縁線部分から口縁部が斜め上方へ大きく開くもので、内外面とも風化が著しく、調整は不明である。胎土はクサリ礫と砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。

石器はいずれも荒割り段階の未製品のもので、内訳は石庖丁1、柱状片刃石斧3、扁平片刃石斧2の合計6点である。石材は石庖丁が黒色のスレート製であり、石斧が青灰色の硬質砂岩である。石斧の石材を母岩別に見ると、26・29が同一母岩で、27・28・30が同一母岩で造られている。石器はいずれも大きく割れた剥片に、二次調整の打撃が施され、研磨段階まで完了したものである。付近に石屑等が認められないことから、他の製作場所から搬入されたことがわかる。28は石斧中最大で、長さ25.5cm、幅9.7cm、厚さ7.5cm、重さ2.090gを測る。29は扁平片刃石斧用のもので、長さ12.5cm、幅8.7cm、厚さ3.0cm、重さ430gを測る。

Dトレンチ（図版第28・51）

高槻市八丁畠町390番地にあたり、小字名は釜戸と称する。DトレンチはCトレンチの北東方約150mに位置する。主な層序は、耕土（0.2m）、床土（0.05～0.4m）、暗茶褐色土層（0.15m）〔遺物包含層〕、黄褐色疊土層〔地山〕である。地山は北東から南西方向に少し傾斜している。

遺 構

遺構の多くは北側に集中しており、溝4条、土器窪2ヶ所、土壙4基、柱穴等がある。溝1は調査区の北西部で検出した南北溝である。深さは0.4mを測るが、その他の規模については不明である。溝中からは多数の土器片と木器5点が出土した。土器は5世紀前半の時期を中心として、弥生時代後期後半のものまで含まれている。溝1の東側で検出した溝2は幅0.3m、深さ0.05mを測り、堆積土は暗茶褐色土層である。溝中から遺物は認められなかった。南北方向の溝3は幅0.2～0.5m、深さ0.05～0.2mを測り、その南端はトレンチの南壁まで延びていない。堆積土は暗茶褐色土層である。遺物としては、畿内第Ⅳ様式の壺・高杯片がある。溝4は調査区の南東部で検出した南北溝である。東側の大部分は調査区域外にあるため、深さ0.5mを測るも、その他の規模については不明である。堆積土は2層に分けられ、上層から畿内第Ⅳ様式の壺片が出土した。土器窪1・2は、溝2の東・南側で検出したもので、平面形は不定形な隋円形を呈している。土器窪2の規模は長径2.7m、短径1.4m、深さ0.5mを測り、断面は舟底状を呈する。埋土はいずれも暗茶褐色土層であり、土壙内からは、破損した小さな土師器が多数出土した。土壙1は、調査区の北西部で検出したもので、平面形は長方形を呈する。規模は長辺1.2m、短辺0.75m、深さ0.2mを測り、底面が水平であるため、木棺墓であった可能性が高い。埋土は暗茶褐色で、遺物は認められなかった。土壙2は溝4のすぐ西側で検出したもので、平面形はほぼ正方形を呈する。規模は一辺1～1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は暗茶褐色土層であり、遺物は認められなかった。柱穴群は、調査区の北西部で検出したもので、平面形は円形を呈する。規模は径0.2～0.3m、深さ0.3m前後を測る。

埋土は暗茶褐色土で、遺物は2~3の柱穴から土器片が数点出土している。時期は不明である。

遺物（図版第30-2~6、31-a）

検出した遺物は、各溝および土器溜から出土した土器類が主なものである。その他に溝1から出土した木器類がある。土器は溝3・4から出土した畿内第Ⅱ様式のものが少數ある他、溝1と土器溜から弥生時代末~布留式併行期のものが若干ある。しかし、溝1から出土した高杯（2・3・5・6）と小型壺（4）以外は、小さな破片ばかりであって、完形に復元することができなかった。その他の器種としては、壺・甕・高杯等があるが、その中でも高杯の出土量が最も多い。3以外の高杯は、いずれも杯部だけのものであって、全容を知れるものは少ない。高杯の杯部は縦線部分をもたないもので、いずれも口縁部が斜め上方へ大きく開くものである。脚部は中空である。4は溝1の底部から出土したもので、口縁部と底部を欠失している。

出土した木器は、板材2、加工痕のある丸太材1、流木2の合計5点である。完形品が見られず、多数の土器片と一緒に出土していることから、ゴミとして投棄されたものであろう。

Eトレント（図版第27・51）

高槻市八丁畠町226-3番地にあたり、小字名は上明と称する。今回の調査範囲予定地内では、最も東側に位置している。トレントは、東西7m、南北14mとして設けた。主な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.2~0.3m)、暗茶褐色土層(0.05~0.5m)、黄褐色疊層~暗茶褐色土層[地山]である。

遺構

検出した遺構は、弥生時代中期前半の方形周溝墓4基である。調査範囲が限られることから、埋葬施設および規模等については不明な点が多い。方形周溝墓1は調査区の南側で検出されたが、北・東溝との一部を検出したのみで、大部分は調査区域外にある。周溝は幅0.9~2m、深さ0.6mを測り、埋土は暗褐色土層と黄茶褐色土層である。遺物は東溝から土器片が数点出土したのみで、時期については不明である。なお、トレントの西壁面の観察によると、方形周溝墓1の北溝は、方形周溝墓3の南溝を切って造っていることがわかる。方形周溝墓2は調査区の北東部で検出されたが、南・西溝を検出したのみで、大部分は調査区域外にあり、規模等は不明である。周溝の規模は幅1.5~2.7m、深さ0.2~0.3mを測り、埋土は暗茶褐色土層である。遺物としては、南溝から土器片が数点出土したのみで、時期については不明である。しかし、北壁面の観察によると、方形周溝墓2の西溝は、方形周溝墓4の東溝を切って造っていることがわかる。方形周溝墓3は、調査区の西側で検出されたが、東・南・北溝を検出したのみで、大部分は調査区域外にある。台状部は東側の南北辺で6.2mを測る。周溝は幅1.1~2.7m、深さ0.3mを測る。埋土は茶褐色土層である。遺物は西溝から破碎した大型壺と壺片がある他、北溝より壺の口縁部1個体分を検出した。また、墳丘盛土より、伏せた状態の壺底部を検出した。時期はいずれも畿内第Ⅱ様式に位置づけられる。方形周溝墓4は、調査区の北西部で検出されたが、東・南溝の一部を検出したのみで、大部分は調査区域外にある。周溝は幅1.2~1.8m、深さ0.4mを測る。埋土は暗灰色土層であり、遺物はまったく認められなかった。トレント西壁面を観察すると、方形周溝墓4の溝が埋没した後に、方形周溝墓3の盛土がおこなわれており、4基の方形周溝墓の中では一番古い段階に築造されたことがわ

かる。

遺物（図版第30-7・8）

Eトレーナーからの出土遺物は、方形周溝墓に供獻された土器と、周溝内に流入した土器に分けることができる。7は大型の壺で、球形に近い胴部に短く直立する頸部と外反する口縁部を有する。外表面は風化が著しく、調整・文様等はまったく不明である。内面はナデチ調整によって仕上げられている。胎土は軟質で、クサリ礫と砂粒を多量に含んでいる。色調は灰白色を呈している。8は壺の底部である。出土状態の段階から上部を失している。内外面とも風化が著しいが、外表面にヘラ磨き痕が観察できる。胎土はクサリ礫と多量の砂粒を含んでいる。色調は暗褐色を呈する。その他、周溝内に流入した遺物として、繩文時代晚期の船橋式の土器片が1点ある。外表面は磨滅を相当受けているが、特徴的な凸沿を1条有している。胎土は生駒西麓の土が使用されている。

〔資料〕 安満遺跡の花粉分析

〔I〕はじめに

昭和56年度に高槻市教育委員会が実施した安満遺跡の確認調査にともない弥生時代の自然環境を推定するため花粉分析を実施した。

採取した試料は次の3試料である。

- (1) Aトレーナー第Ⅰ様式期の土器窓
- (2) Aトレーナー第Ⅱ様式期の溝
- (3) Aトレーナー第Ⅲ様式期の方形周溝墓の周溝

〔II〕分析処理法

試料約200~300gを次のように処理し花粉・孢子類を抽出、永久プレパラートを作成した。

試料→ピロリン酸ナトリウム液で泥化→沈んでん法による水洗→沈泥振動法による植物質の濃縮→塩化アエン飽和溶液による比重分離→水洗→氷酢酸処理→濃硫酸・無水酢酸の混液(1:9)による処理→氷酢酸処理→水洗→グリセリンゼリーで封入→プレパラート仕上げ。

検鏡は400倍でおこない、それぞれの花粉について同定し、各試料ごとに樹木花粉が200をこえるように計数し、百分率であらわした。

〔III〕結果

検出された花粉を樹木と草本とに分けて表にしたのが第1表・第2表である。

検出花粉のうち同定不確実のものや、決定できないものもかなりあるが、これらを除き同定できた花粉を科・属毎にまとめた。

試料(1)は花粉化石の含有量が悪く、樹木花粉が幸うじて200に達する状態であったが、試料(2)・(3)は共に600~800の樹木花粉を計数することができた。

樹木花粉の表中、コナラ属(*Quercus*)はクヌギ・カシワ・コナラなどのコナラ亜属(*Lepidobalanus*)とアカガシ・アラカシなどアカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)を一つにまとめたものである。その検出量は3試料ともにアカガシ亜属の方が多い。

また樹木花粉と草本花粉の検出比(樹木/草本)は試料(1)が2.4、(2)が1.2、(3)が2.4となる。

科	属	(1) %	(2) %	(3) %
イチョウ属	Ginkgo	—	0.8	0.3
マキ属	Podocarpus	—	1.3	0.4
モミ属	Abies	4.3	5.1	7.4
ツガ属	Tsuga	—	2.9	0.5
マツ属	Pinus	18.6	19.4	25.2
コウヤマキ属	Sciadopitys	1.1	0.3	0.4
スギ属	Cryptomeria	2.7	0.8	2.0
ヤナギ属	Salix	1.6	1.7	1.3
ヤマモモ属	Myrica	—	1.6	0.3
クマシデ属	Carpinus	3.7	3.8	1.9
ハシバミ属	Corylus	1.6	1.1	1.1
シラカンバ属	Betula	—	0.8	0.1
ハンノキ属	Alnus	3.2	0.6	2.2
ブナ属	Fagus	0.5	0.5	—
コナラ属	Quercus	40.9	42.3	29.3
シイノキ属	Castanopsis	17.0	12.6	23.0
クリ属	Castanea	—	1.3	—
ニレ・ケヤキ属	Ulmus・Zelkova	3.2	1.9	0.7
エノキ属	Celtis	—	0.5	2.0
モクレン属	Magnolia	—	0.2	—
タブノキ属	Machilus	1.6	—	—
サクラ属	Prunus	—	0.3	0.8
カエデ属	Acer	—	0.2	0.3
アオイ属	Malvaceae	—	—	0.5
グミ属	Elaeagnus	—	—	0.3

第1表 樹木花粉

科	属	種	(1) %	(2) %	(3) %
イネ科	Gramineae	大型	30.0	3.7	23.3
		小型	11.3	1.5	3.8
ソバ	Fagopyrum		3.7	-	-
アブラナ科	Cruciferae		5.0	1.5	4.2
ヨモギ	Artemisia		16.3	3.8	7.0
セリ科	Umbelliferae		2.5	2.1	1.9
カナムグラ	Humulus		5.0	74.2	19.2
ナデシコ科	Caryophyllaceae		10.0	2.9	1.3
キク科	Compositae		6.3	4.4	1.9
タデ科	Persicaria		2.5	0.4	0.6
アカザ科	Chenopodium		3.7	3.5	32.6
ユリ科	Liliaceae		3.7	-	-
ウリ科	Cucurbitaceae		-	1.2	-
オナモミ	Xanthium		-	0.4	1.0
ガマ	Typha		-	0.4	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae		-	-	0.6
オキナグサ	Solidago		-	-	2.6

第2表 草本花粉

[IV] 考察

分析結果の数値がそのまま周辺の植生をあらわしているとは限らないが、これをもとにして当時の自然環境についてその概要を推定してみることにしよう。

(1) 樹木花粉(A.P.)について

全般的にコナラ属・シイノキ属のブナ科花粉が圧倒的に多く、次いでマツ属花粉であるが、3つの時代を通じて植生の大きな変化はみられないようである。

また、コナラ属の中には常緑のアカガシ亜属と落葉のコナラ亜属があるが、常緑のアカガシ亜属のコナラ属全体の中で占める割合は試料(1)で78%、試料(2)で90%、試料(3)で74%といずれも高率を示している。このことからコナラ属花粉の大部分は常緑のアカガシ亜属花粉であろうと思われる。このアカガシ亜属と常緑のシイノキ属がいわゆる照葉樹林を形成する主要樹種であることから、この2種の花粉検出量の合計が樹木全花粉量に対して占める割合を求めてみると、試料(1)は48.9%、

(2)は53.1%、(3)は44.7%になる。このようにこれらの花粉が樹木花粉全体のはゞ50%近くであることから、付近には照葉樹林が広く存在していたものと考えられる。

次にコナラ属を主体としたブナ科とマツ属のうつり具合を相対的に検討してみると、時代の移るにつれてブナ科は減少しマツ属が増加している傾向にある。この傾向をブナ科花粉のマツ属花粉に対する相関比（ブナ科/マツ属）で示すと、(1)が3.11、(2)が2.89、(3)が2.07となる。

これはマツ属花粉1ヶに対するブナ科花粉数を示すことから、ブナ科が次第に減少していることがわかる。

また、ブナ科の中の常緑種であるアカガシ亜属とシノノキ属、すなわち照葉樹とマツ属とを比較（照葉樹/マツ属）してみても試料(1)は2.63、(2)は2.61、(3)は1.77となり、同じ傾向を示す。

この植生変化の傾向は1966年京都大学農場北側の安曇遺跡発掘調査で実施した花粉分析の結果と同じである。

何等かの原因で照葉樹林に漸次マツが侵入していく遷移の過程がうかがわれる。これらにまじってモミ属・スギ属・クマシデ属・ハンノキ属・ケヤキ・ニレ属などの樹木が生育していたと思われる。

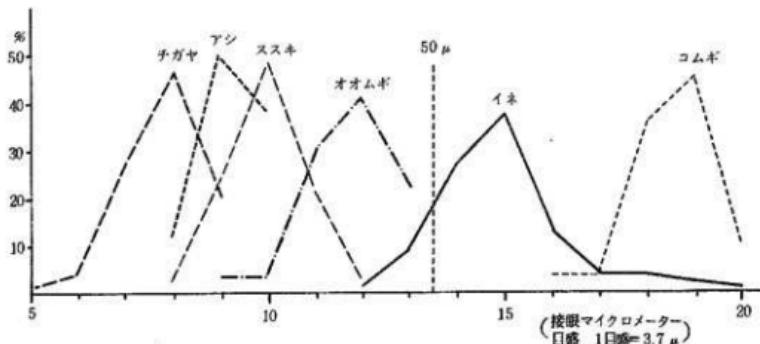
花粉の形態からハンノキ属はヤシャブシ・ハンノキ、マキ属はナギ、シラカンバ属はミズメであろうと思われる。また、コウヤマキの花粉が少量ではあるが検出されている。1966年の発掘調査で出土した棺材がコウヤマキであった。この棺材と関連性があるのではなかろうか。

(2) 草本花粉 (NAP) について

全般的にヨモギ・カナムグラ・ミゾソバなどのタデ科・ハコベなどのナデシコ科・ナズナなどのアブラナ科・ノアザミなどのキク科・イノコヅチなどのアザガ科・イネ科などが近くの平地に生育し、湿地や水辺にはセリ科・ガマなどがあったと考えられる。

検出された花粉の中でイネ科は試料(1)・(3)で多く、しかも50ミクロン以上の大型が目立つ。この50ミクロン以上の大型イネ科がすべてイネであるという実証はないが、筆者が現生イネ科花粉の大きさを比較したもの（挿図8）を参考にしてみるとイネであろうと推定することもできよう。一方試料(2)ではイネ科花粉はきわめて少なく、大型イネ科花粉は試料(1)の約1/10である。この第I様式包含層でイネ科が多く第II様式包含層で少ない傾向は1966年の調査と全く同じである。1966年の調査では大型イネ科が第I様式包含層で17.0%、第II様式包含層で5.5%と減少している。そして明らかにスズメノテッポウなどのイネ科雑草と思われるものが前者で12.5%、後者で21.0%と雑草類が多くなっている。これらのことから推察すると、何等かの原因でイネ栽培が一時的に中断され、水田が原野になりカナムグラなどの雑草が繁るようになったのではなかろうか。そして第III様式の時代になり、ふたたび水田が開かれ、イネが栽培されるようになったのが試料(3)の大型イネ科花粉の増加としてあらわれているのであろう。調査試料も少なく確定的なことは言えないまでも前述のような傾向がうかがい知ることができよう。

また検出されたソバ・ウリ・アブラナ科は近くで栽培されていたものと思われる。（徳丸）



挿図 8 主要現生イネ科花粉の大きさ

VII 阿武山古墳

12. 阿武山古墳の調査

阿武山古墳は、高麗市大字泰佐原 9.44 番地の 11・154 と茨木市大字安威 2336 番地の 7 にまたがって所在する。現状は山林である。「貴人の墓」として著名な阿武山古墳は、京都大学阿武山地震観測所のすぐ北、俗称「美人山」と呼ばれるところに位置し、三島平野を一望に見渡せる場所に立地している。阿武山古墳のある丘陵の南斜面一帯には、「塚原八十塚」として知られる古墳時代後期の塚原古墳群が、また西斜面には同期の桑原古墳群があって、阿武山古墳出現の前提として、丘陵全城が以前から墓域としてあったことが指摘できる。そして、阿武山古墳はその中心に占地している。

さて阿武山古墳は、昭和 9 年 4 月、京都大学阿武山地震観測所が観測機器の設置工事をおこなった際、地表下約 3 m のところから小型の石室が露出し、偶然に発見されたものである。石室は花崗岩の切り石と埠によって構築されており、石室内部は漆喰を塗って仕上げられていた。しかも、石室内の棺台上に、完存する夾紵棺があり、棺内には 60 才前後の男性人骨が、衣服を着た状態で検出された。また、この遺骸の頭部には、ガラス玉を連ねて作った玉枕が置かれ、頭部から顎面にかけて金糸が散らばっていた。こうした珍宝な資料にかかわって、当該古墳の被葬者を三島の地と関係の深い「藤原鎌足」とする説があり、論議を呼んでいる。調査は、同古墳が発見された当初、工事の指揮をとっていた志田順博士によって実施されたが、その後大阪府史蹟名勝天然記念物調査会の梅原末治博士が調査を引き継がれ、終了後には遺体および夾紵棺は現地保存のため、再び石室内に埋め戻された。発掘調査の成果については、昭和 11 年 3 月、大阪府史蹟名勝天然記念物調査報

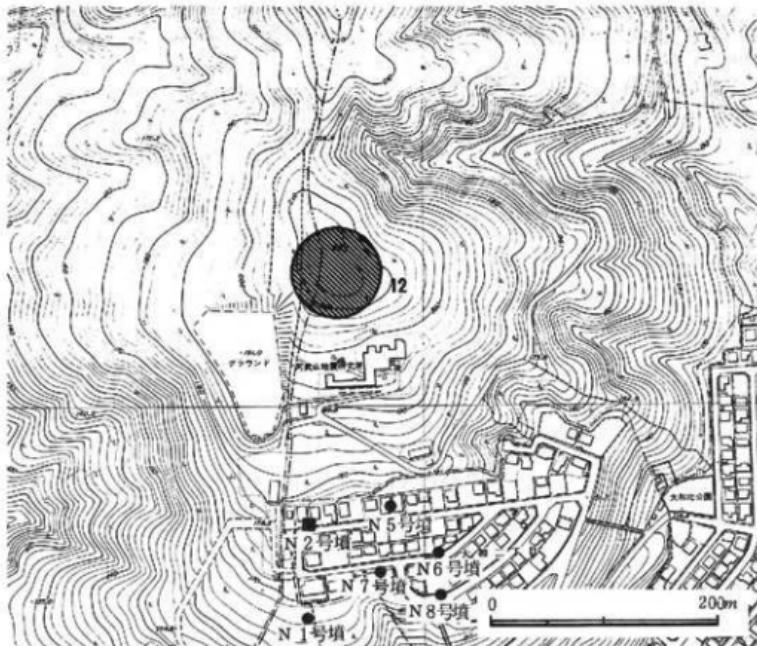
告第7輯として刊行されている。

今回の調査は、阿武山古墳の史跡指定を前提とし、古墳の範囲を明らかにする目的で実施した。調査は大阪府教育委員会並びに茨木市教育委員会との三者が共催しておこなった。

遺構（図版38～42・52～56）

阿武山古墳は、阿武山（標高281m）の山頂から南に延びる尾根の先端部（標高213m付近）の平坦面に位置し、そのわずかな高まりを利用して築かれている。古墳の北側で尾根はくびれていて、古墳は自然地形によって造られた恰好となっている。古墳の盛土は、今回の調査範囲ではまったく認められなかった。石室は尾根の最高部よりやや低いところに設けられ、その覆土は測量図をみるとおりで顕著ではない。石室を中心にして設けたトレンチでは、低い段と深い溝を検出した。これらの段および溝は石室を中心として、方形にめぐっており、一辺約18mを測る。この方形区画は、地下の石室構築直後の地山整形とも考えられるが、具体的な意味あいについては、いまのところ詳らかにし得ない。遺物は、第1・4・5トレンチから須恵器片が各1点ずつある。

排水溝は、南側斜面に設定した第5・9・10トレンチで検出した。第5トレンチでの情況では、地表面下0.2mの黄土色土層〔地山〕を掘り込んでおり、上幅0.85mを測る。埋土は黄褐色土層で



挿図9 阿武山古墳の調査位置図

ある。深さについては、トレンチの規模が小さく、掘り下げ作業が困難であったため明確でない。第9・10トレンチは、前回の調査位置と重複しており、第9トレンチで検出した排水溝は、大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯の図版第12-(1)にその写真が掲載されている。前回と今回の調査結果からみると、排水溝は、地表下約3m掘り下げた梢円形の墓壙から、南側斜面を約30mの長さにわたって設けられていることがわかった。排水溝の規模は上幅0.7~0.9mを測り、断面はV字状を呈する。底面には拳大ないし人頭大の山石を2~3段積にして暗渠としている。排水溝の方向は、磁北に対して西に約13度偏っている。

今回検出した周濠は、前回の調査時に、約0.5mの段か直徑約82mの範囲でめぐらしているとされるものにあたる。周濠の規模等を確認するため、東側の第11トレンチから第29トレンチまで、合計19ヶ所のトレンチを設けて調査を実施した。その結果周濠は石室を中心として、ほぼ円形にめぐらされていたが、自然地形が谷間になる北東部・北西部については省略されており、一巡しない。その他第25トレンチで検出した周濠は、本来、南側にカーブを描いて曲らなければならないところを、排水を重点においたためか、北側の谷に直角に折れて掘削されていた。

周濠内からの遺物は、第12・18・20・27トレンチから出土した須恵器・土師器片が若干ある。出土した遺物はいずれも細片である。遺物の出土層位は、第18トレンチから出土した蓋杯(3・4)が、濠底に設した状態で検出したほか、その他の土器についてもほぼ似た層位から出土している。

周濠の規模は、地形が斜面地であるためにバラツキが認められ、上幅2~2.7m、下幅0.5~1.2m、深さ0.3~0.7mを測る。濠の直径は、東西径約84m、南北径約80mを測り、ほぼ直円に近く、石室はその中心に見事に位置している。

遺物(図版第43・44)

出土遺物は、須恵器・土師器・博片等が若干ある。いずれもトレンチからの検出であって、完形品に復元できたものは少ない。須恵器の蓋杯(1~6)は、第18トレンチから出土したもので、4点を復元することができた。蓋杯は、たちあがりが退化し小形化したもので、口径約10cm、器高3~4cmを測る。調整は比較的難で、底部の回転ヘラ切りは末調整のものが大半を占める。3・4は胎土・焼成等からセッティングと考えられるものである。7は大型壺の口縁部で、11・12は甕腹片である。8・10は小型壺の破片であるが、器形まで推定することはできなかった。9は土師器の杯か皿の破片である。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良である。調整は風化が著しいため不明である。13は第9トレンチの排水溝から出土した埴質の博片である。博片は、遺存長20cm、幅27cm、厚さ4cmを測る。外表面の調整は全体に丁寧なナナデ調整を施しているが、片面の一部にヘラ削り痕を残している。色調は黄~赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

阿武山古墳の年代については、前回の右室内部の調査でも決め手となる遺物が少なく、時期を明確にできなかった。しかし今回の調査では、破片であるが周濠から、須恵器の蓋杯・壺・甕片が出土し、一応古墳の年代を推定する手懸を得た。各トレンチから出土した須恵器は、陶色の須恵器編年によると、所謂Ⅱ期の終末期と考えられるものである。正確な年代決定については、今後の研究にゆずるが、一応、7世紀の第1四半期と第2四半期との間とするのが妥当である。

VII まとめ

今年度も山上郡衙跡およびその周辺地域の調査を12ヶ所余り実施した。そのなかの主なものについて要点を記し、まとめてかえる。

山上郡衙跡周辺24-II・L・25-M・O・P地区の調査では、芥川庵寺にかかる資料が蓄積された。調査は実質的にトレンチ調査となつたため、伽藍を推定できるほどの遺構は検出できなかつたが寺の立地について新たな知見を得た。寺は周囲より一段高くなつた暗灰色疊土層上に営まれており、東側に対峙するであろう山上郡衙跡とは凹地を介してあり、一定の隔たりをもつて立地していたと思われる。遺物は瓦が主で、従来あまり知られていない平瓦類について、その形状が復元できた。また「西寺」銘を有する平瓦は枚方市牧野瓦窯で焼かれたとされるものであるが、これについても今回はじめて、全形を計測できた。軒平瓦については、平城宮6664型式のものを検出しており、本文でも触れたように、范の移動などが考えられ、本庵寺が郡寺的性格の強い寺院としてあつたという推定をより確かなものにしている。

5-E・F地区は山上郡衙跡の北西部にあたり、南平台丘陵の南端部と低位段丘との接点に位置している。当該地周辺の調査では7~8世紀にかけての掘立柱建物跡がしばしば検出されており、郡衙中心域とは異なる区画をもつた一定地域が設定されるかもしれない。そのなかにあって本調査区で検出した建物2は一辺1mの方形柱穴をもつ立派なもので、立地も1段高くなつたところを整地して建てられており、中心的な堂屋と目されるものである。また建物4の柱穴から出土したフィゴの破片などから、山上郡衙・芥川庵寺造営時における工人の集住地とも推測される。いずれにせよ、郡衙の北隣の地に集落のあったことは間違いく、その実体については今後の課題となるであろう。

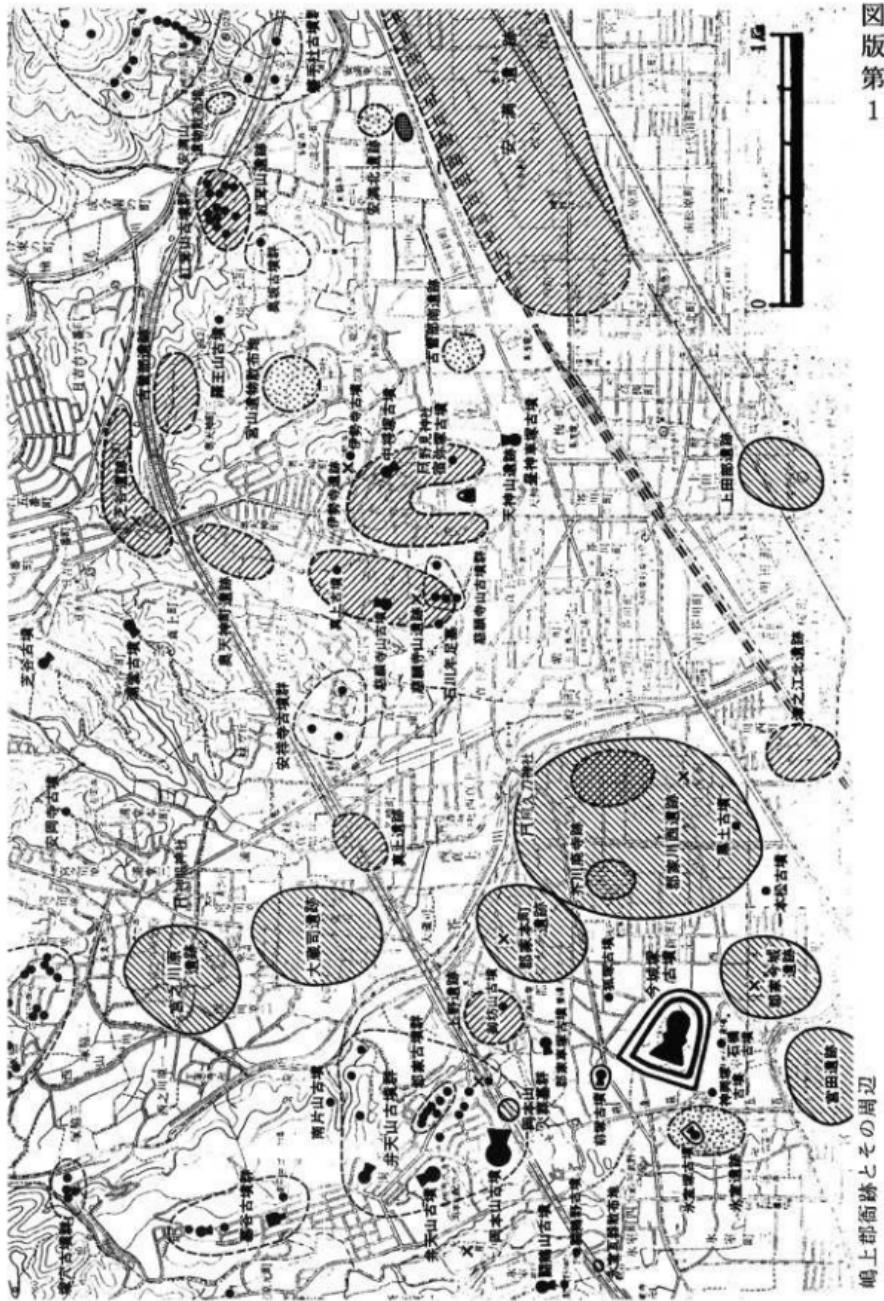
安満遺跡では、史跡指定予定に伴う確認調査を昨年度に引き続いて実施したほか北東部での緊急調査を実施した。北東部の調査では方形周溝墓・住居址を確認し、遺跡の東部にある中期の墓域がさらに東北方へ拡がることが確かめられたほか、弥生~古墳時代にかけての居住地域がさらに限定して考えられるようになった。一方周溝墓の溝内から検出した後期の土器群は9地区で得た資料と併行関係にあり、この組成にはいまだ二重口縁壺と手焙形土器は加わっていない。しかも当該地域は安満遺跡の最奥部にあたり、直後に出現する紅岸山遺跡の集落とは最も近い位置にあたる。安満弥生集落の衰退と紅岸山弥生集落の成立とを有機的に促進する視点においてはすこぶる合点がいく。

確認調査は3ヶ所のトレンチを設定しておこなった。その成果については、本文に詳しいが、いずれのトレンチにおいても、遺構・遺物が顕著にみとめられ、改めて、安満遺跡の重要性が確められている。トレンチ調査であるため多くは語れないが、個々にはCトレンチでの石器素材の出土、Dトレンチでの弥生時代中期の溝や土壤の検出、Eトレンチでの弥生時代中期の方形周溝墓の検出などは成果の一端である。また、一方では安満遺跡の集落立地を考えるのに有効な資料を提供している。すなわち、扇状地上に立地する集落といえども、その旧微地形は複雑であり、今回のように遺跡全体を意識的な抽出によりトレンチを設定した結果、空間利用が極めて微地形に左右されてい

ることが判り、単なる距離感によって、各遺構を間違づけるのは危険といわざるをえない。今後の調査においては遺構・遺物の検出もさることながら、旧微地形の復元にも力を注ぐ必要が痛感される。

阿武山古墳は、史跡指定を前提として範囲確認調査を実施した。その結果、石室を中心とした径80mの墓域が確定できた。墓域は幅2mの溝を円形に周続し、東北部と北西部は開口するもののみごとに区画されていた。また排水溝の南端を墓域内に検出したことも成果の一つに加えられる。何分にもトレンチによる調査であることと、中心部には一切手をつけずに保存を計ったため、遺構的にはこれ以上の成果は望めない。遺物は埠と須恵器が出土している。詳しくは本文に譲るが、須恵器の蓋杯は杯身が逆転する直前のものであり、最新の研究成果と照し合わせてみても、7世紀の第2四半期の前半を降るものではない。被葬者については先年浜・藤原鎌足とする考え方があるが、その没年は668年であり、出土した須恵器とは繋りがあるといわざるを得ない。また出土した須恵器がいずれも排水溝の南で出土したことと、4点とも同一型式内で考えられることから、本資料を通して古墳造営時の祭祀に用いられたものと理解するのが妥当である。したがって、今回の調査結果をみると限りにおいては、阿武山古墳被葬者=鎌足説は俄に受け入れ難く、むしろ対案に供すべき資料の出現があるのでないかとさえ思う。今後に期したい。同古墳は、すでに永久保存の道を歩むが、この重要な文化財をいかにして公開するかが保存にあたる側の問題となってくる。慎重に対処すべき課題であろう。（森田）

図 版





a. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Aトレンチ(北側から)



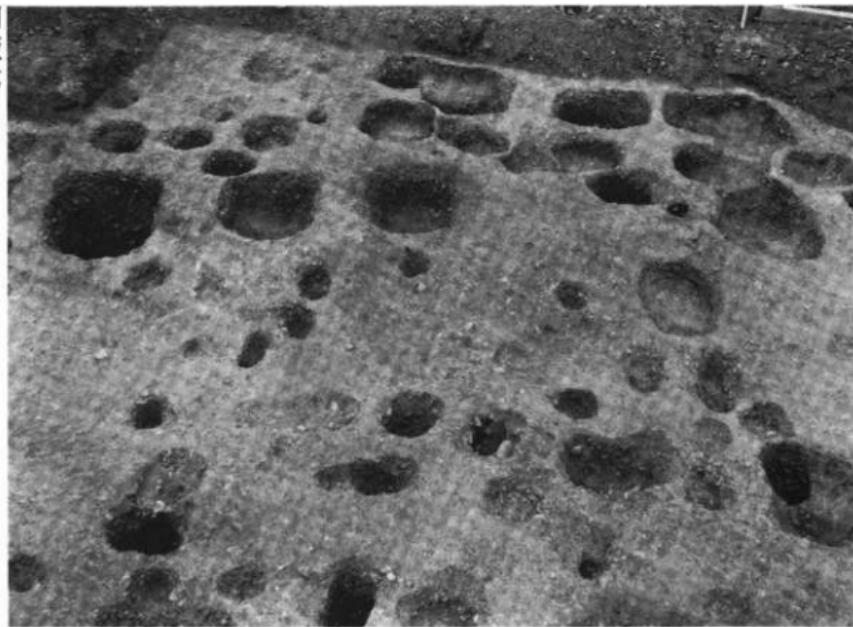
b. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Cトレンチ(東側から)



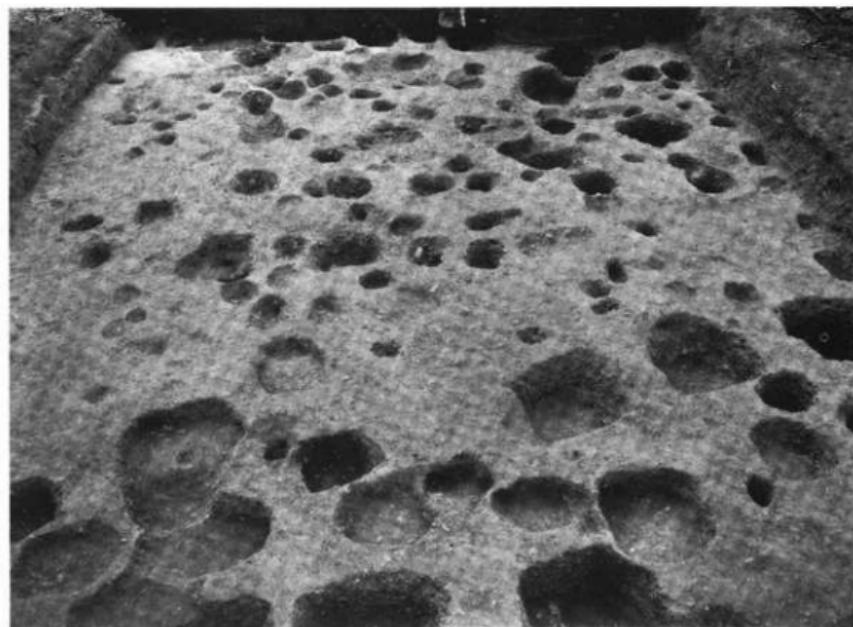
a. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Bトレンチ西部(東側から)



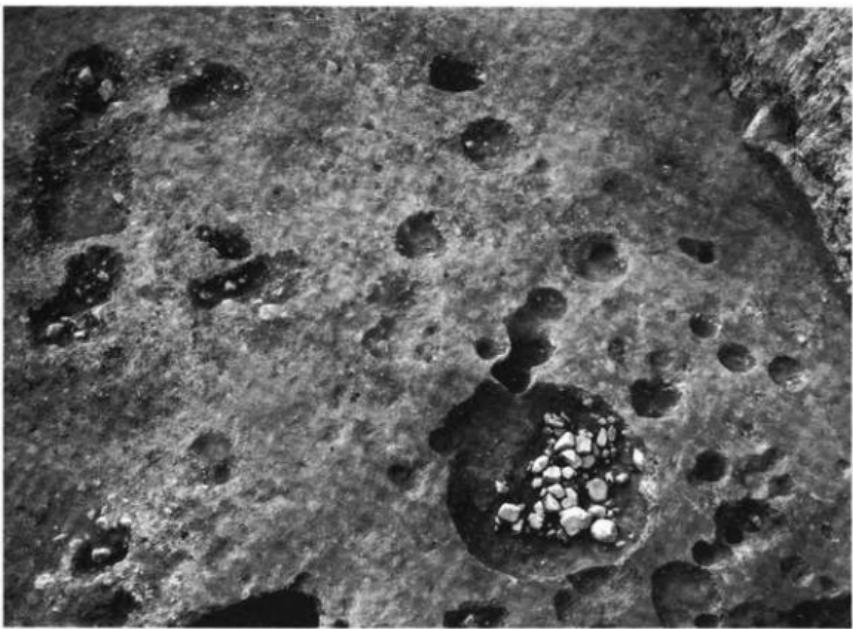
b. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Bトレンチ南部(南側から)



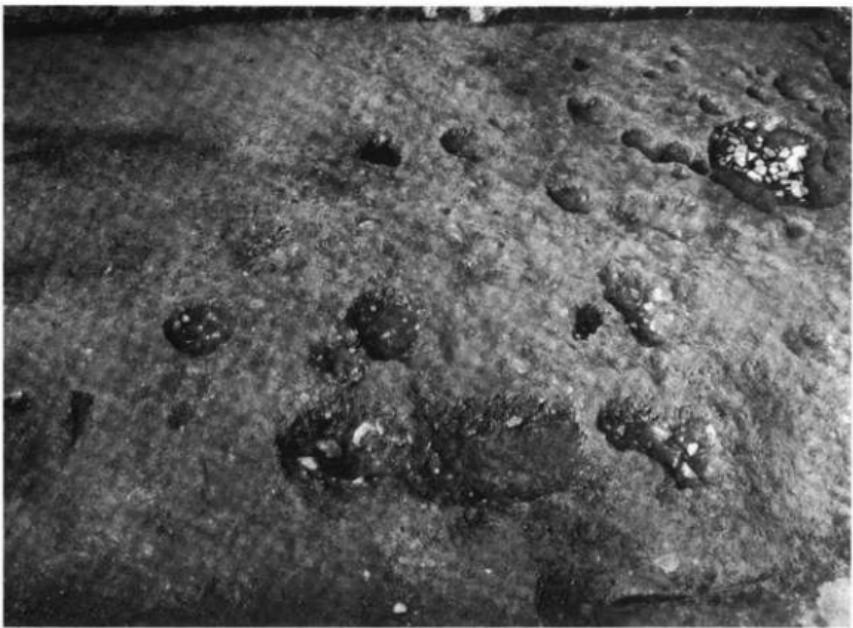
a. 5-E・F地区 西調査区(南側から)



b. 5-E・F地区 西調査区(北側から)



a. 5-E・F地区 東調査区(東側から)



b. 5-E・F地区 東調査区(南側から)



1



2

3



4



5



6



7

24-H-L, 25-M-O-P地区 Aトレンチ P1(1), P12(2), 溝2(5), 包含層(3)
Bトレンチ 包含層(6), 同「西寺」銘平瓦(7), Cトレンチ 包含層(4)
(1)h=11, (2)C=12.1, (3)h=16.9



8



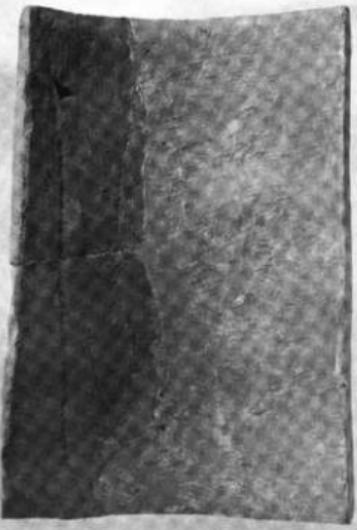
9



10



10'



11

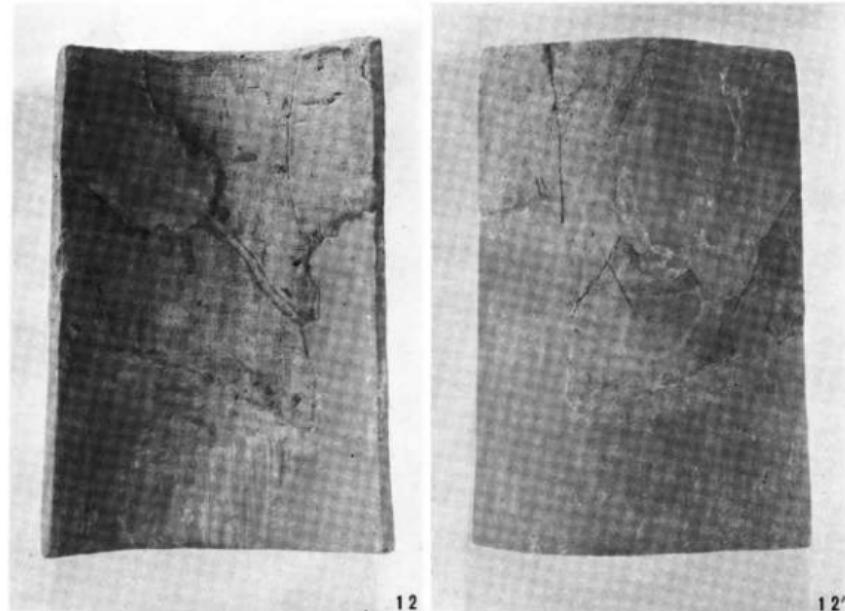


11'

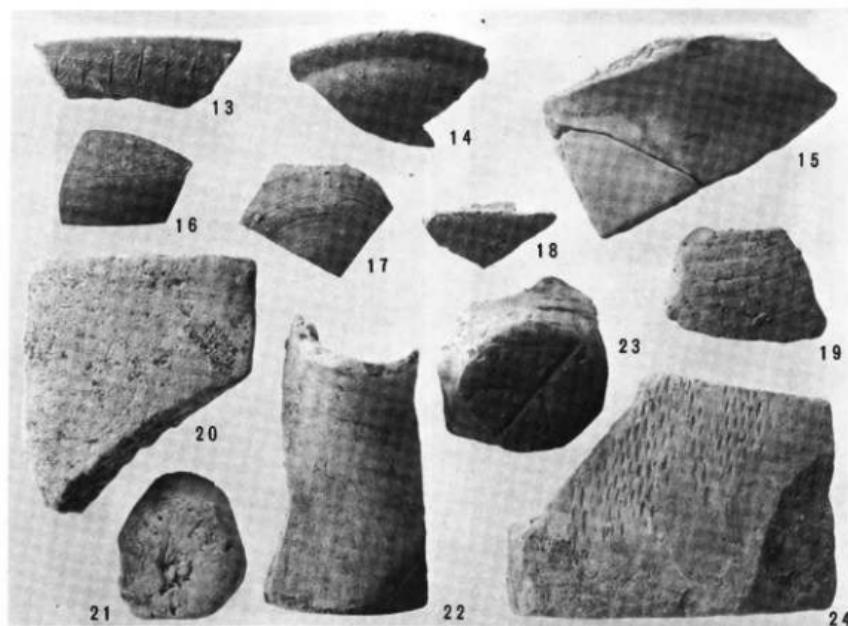
24 - H・L , 25 - M・O・P 地区 B トレンチ

包含層(10・11) C トレンチ P 2 {8}

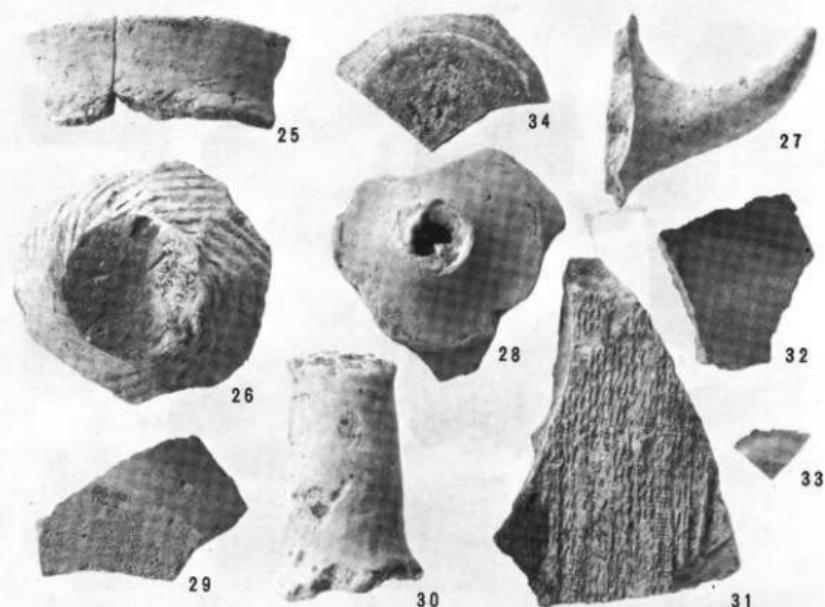
包含層(9) (8) C = 9.1 (9) C = 8



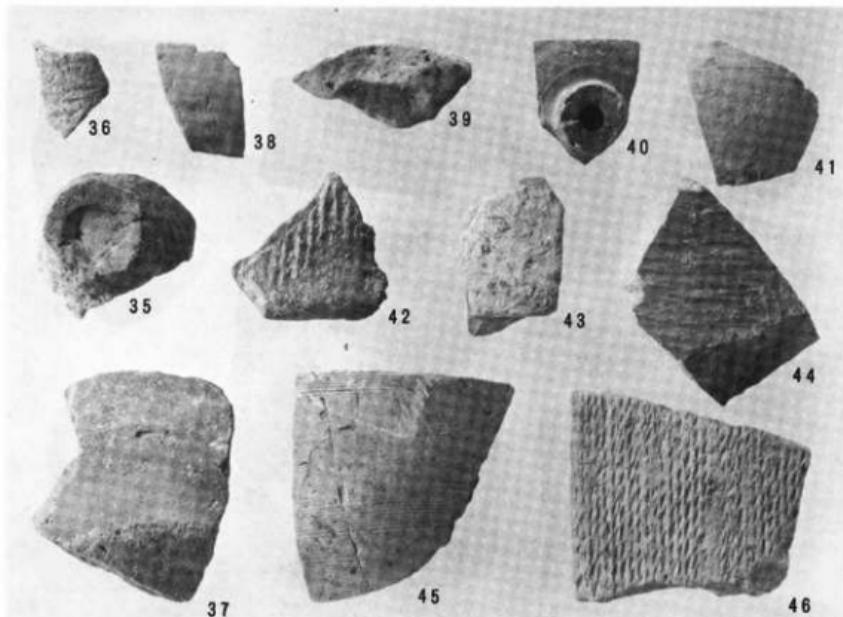
a. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Aトレンチ 包含層(12)



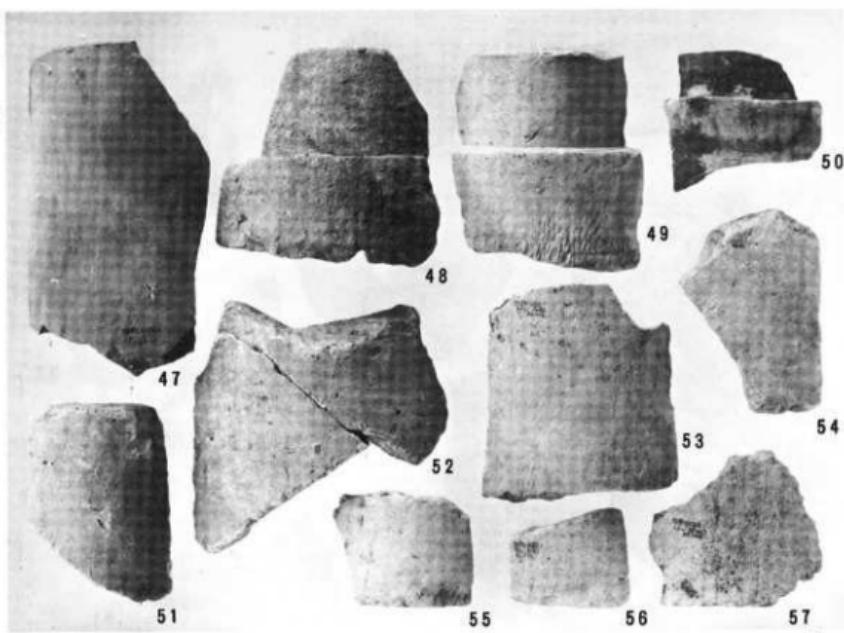
b. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Aトレンチ 溝1(20), 溝2(13-17), P6(23)
P10(16), P11(21) その他包含層 約1/2



a. 24-H-L, 25-M-O-P地区 Aトレンチ P1(25), 包含層(26~33) Bトレンチ(34) 約 $\frac{1}{2}$

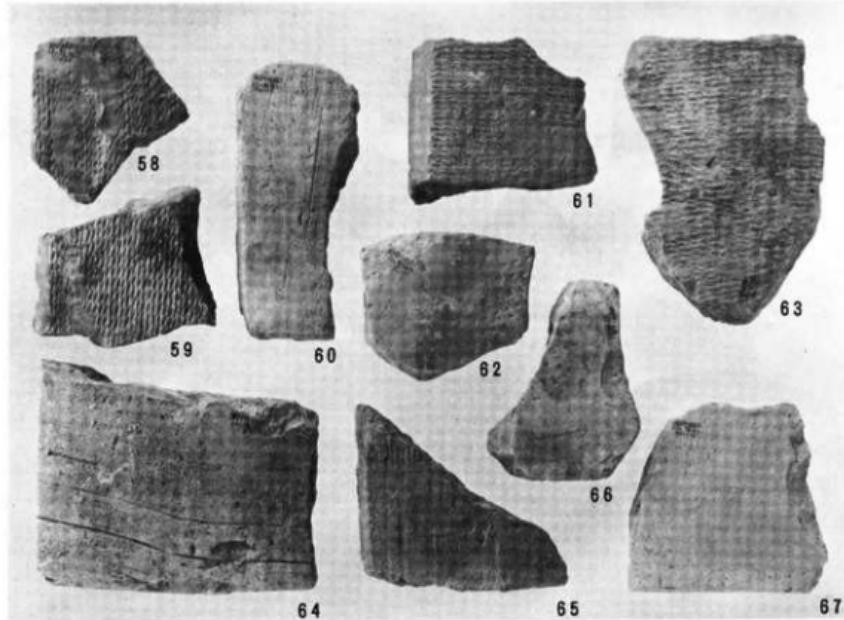


b. 24-H-L, 25-M-O-P地区 Bトレンチ P1(35), 包含層(36~37)
Cトレンチ P1(39~46) P2(38~40), その他包含層 約 $\frac{1}{2}$



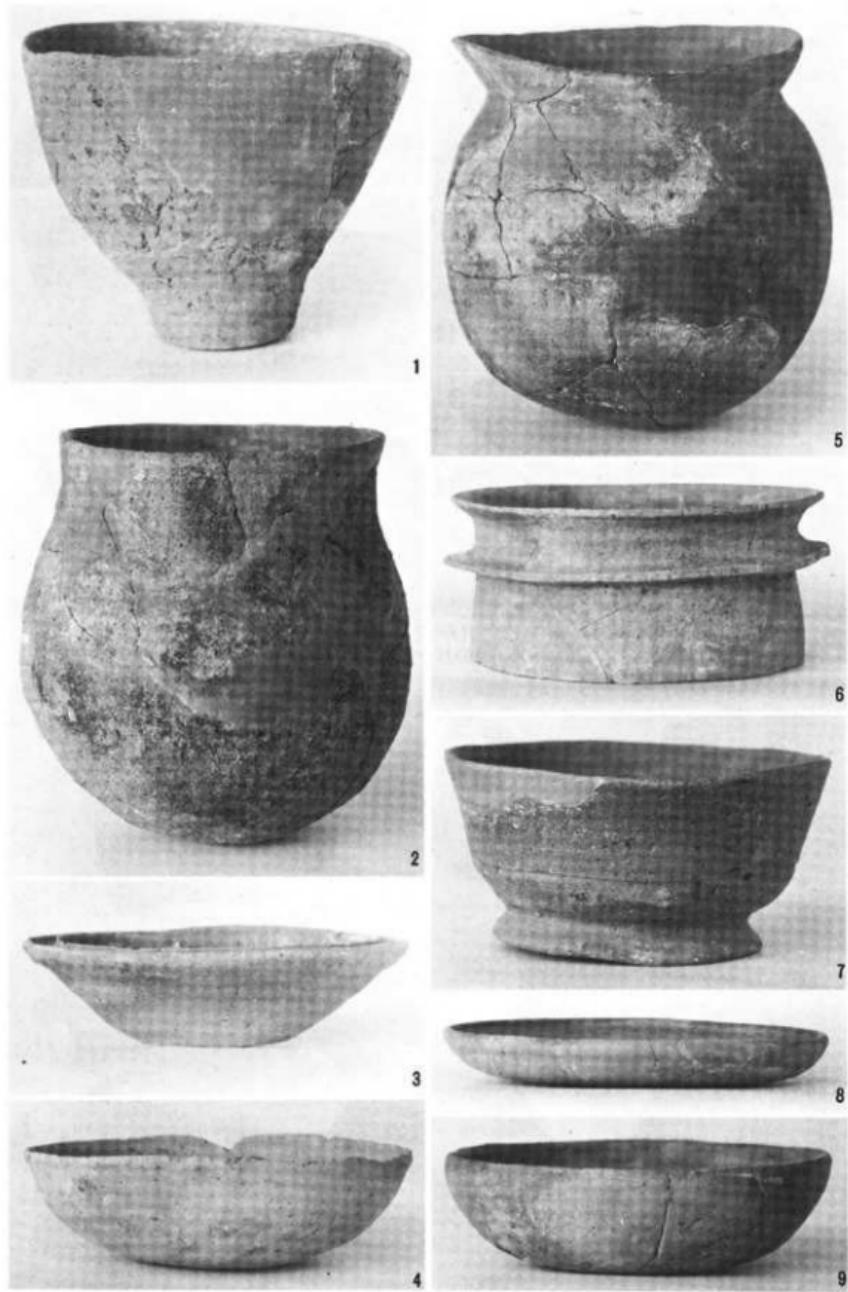
a. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Bトレンチ 包含層(48~54・56・57)
Cトレンチ 包含層(47・55)

約 $\frac{1}{3}$

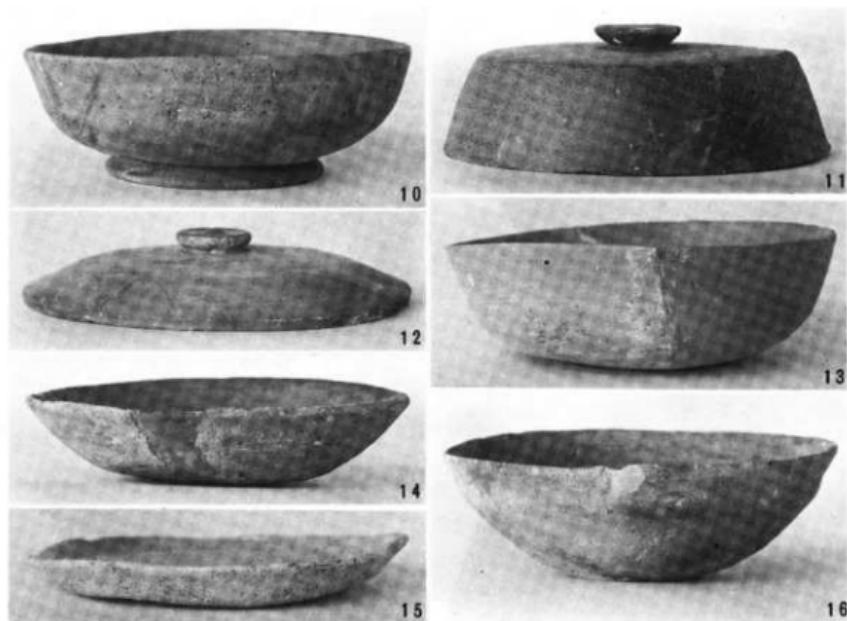


b. 24-H・L, 25-M・O・P地区 Aトレンチ包含層(64), Bトレンチ包含層(58~63・65~67)

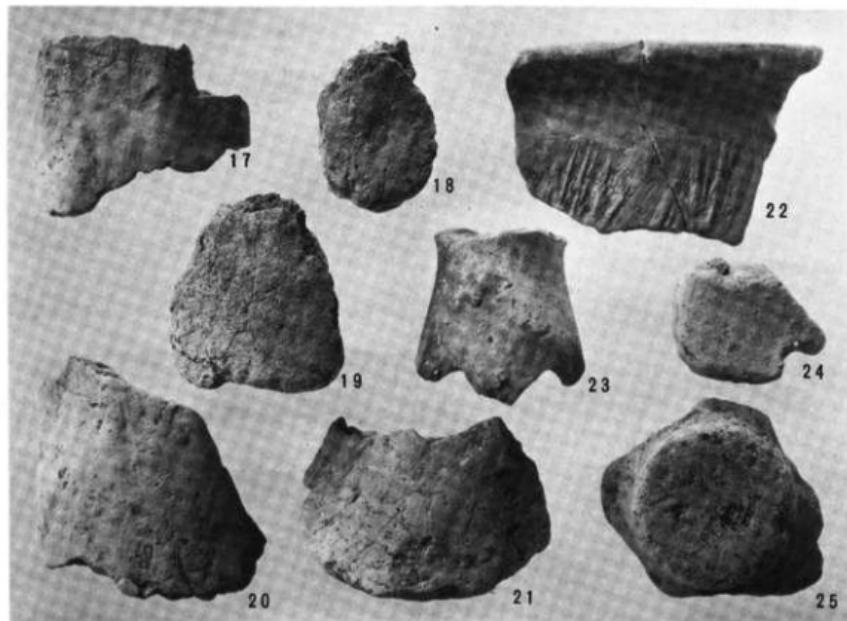
約 $\frac{1}{3}$



5-E・F地区 井戸(1), 土壌4(2), P5(3), P78(4・5・6・7), P61(8), 包含層(9)
 (1)C=8.8, (2)h=14.1, (3)C=10.7, (4)C=12.6, (5)h=13.0, (6)C=26.0, (7)C=9.1, (8)C=21.0
 (9)C=10.5

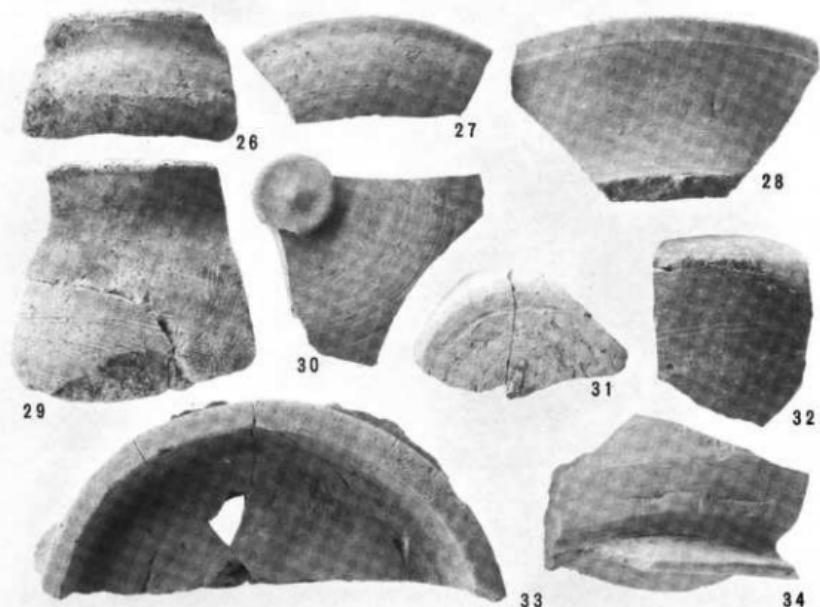


a. 5-E・F地区、土壤6(14), 溝1(12), 井戸(13), P61(10), P63(11), 包含層(15・16)
(10)C=13.1, (11)C=16.2, (12)C=15.6, (13)C=11.8, (14)C=14.6, (15)C=7.7, (16)C=11.9

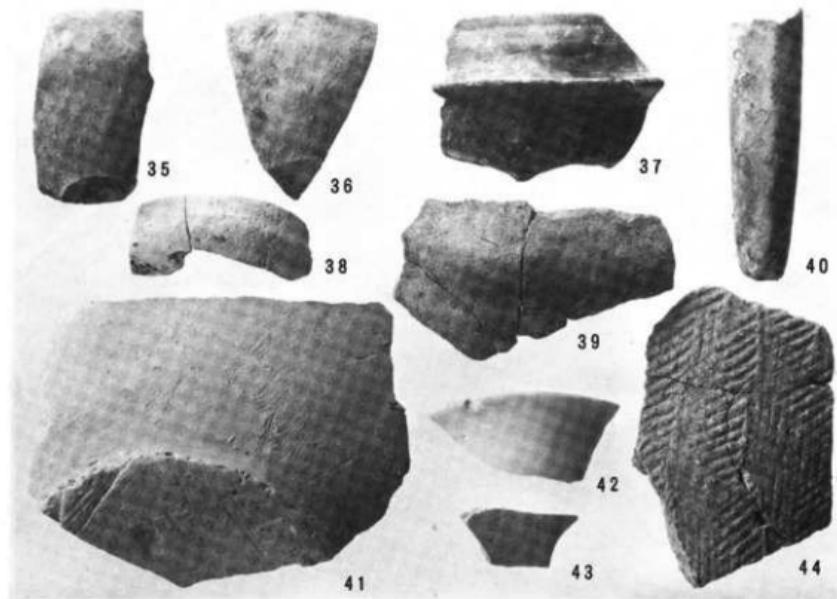


b. 5-E・F地区 土壌6(17~22), P92(23・24), P7(25)

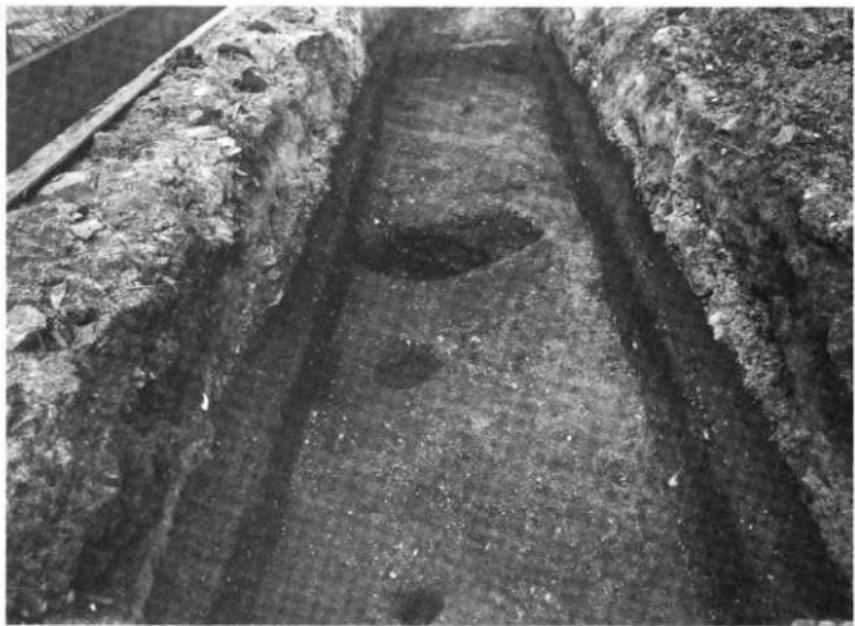
約 1/1.5



a. 5-E·F 地区 溝 1(29·30·34), 土壤 8(32), P14(26), P91(27), 包含層(28·31·33) 約 $\frac{1}{2}$



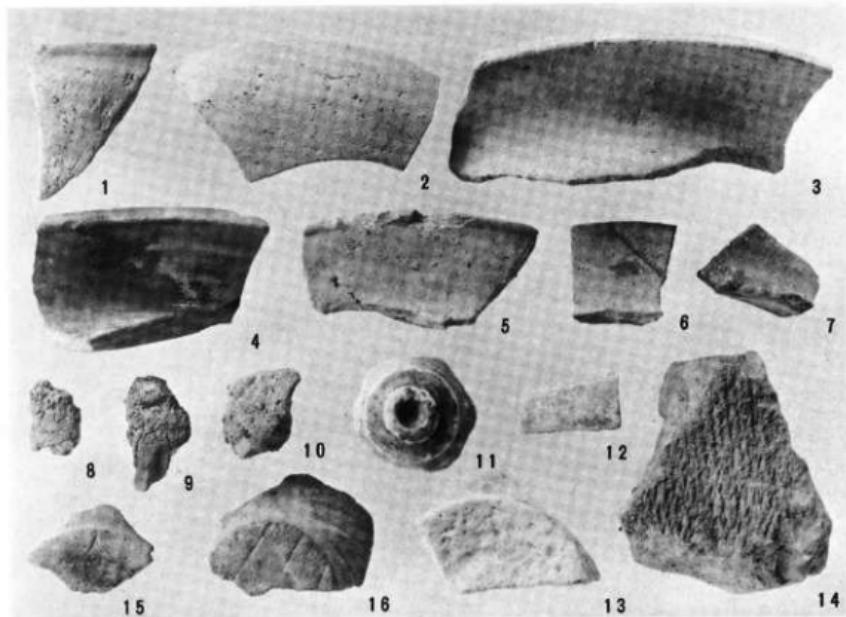
b. 5-E·F 地区 P74(42), P56(43), 包含層(35~41·44) 約 $\frac{1}{2}$



a. 上田部遺跡（南側から）

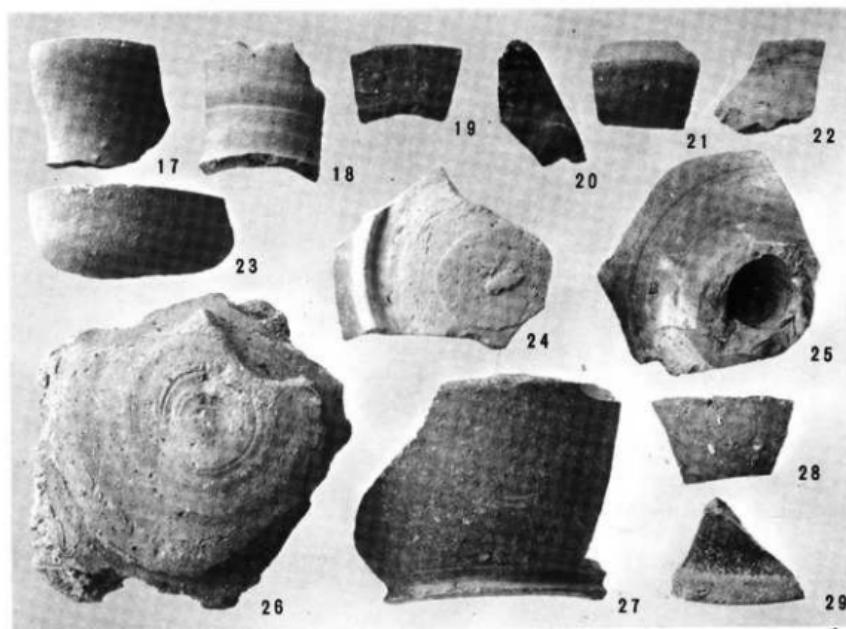


b. 上田部遺跡（北側から）



a. 上田部遺跡 土壙(2), 包含層(1・3~14)

約 $\frac{1}{2}$

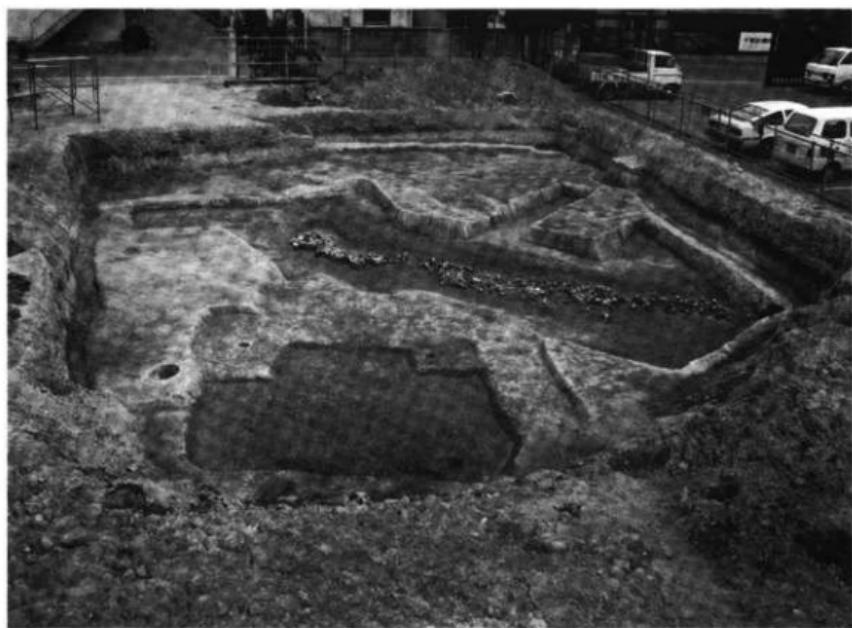


b. 上田部遺跡 包含層(17~29)

約 $\frac{1}{2}$



a. 安満遺跡 西調査区（東側から）



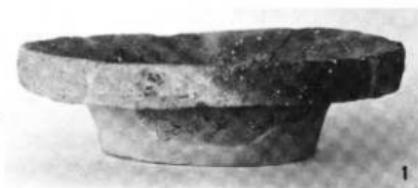
b. 安満遺跡 東調査区（西側から）



a. 安満遺跡 東調査区 方形周溝墓の土器群（北側から）



b. 安満遺跡 東調査区 住居址（北側から）



1



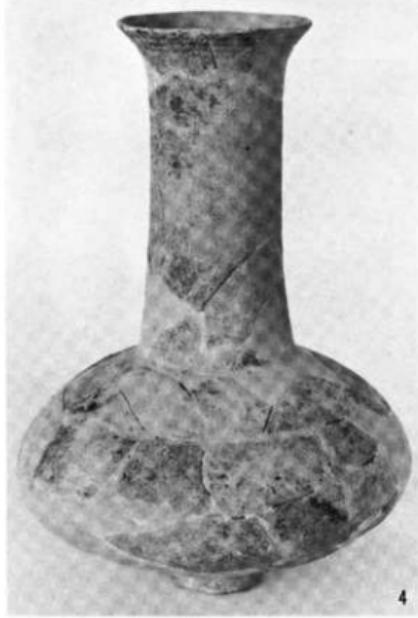
3



2



5



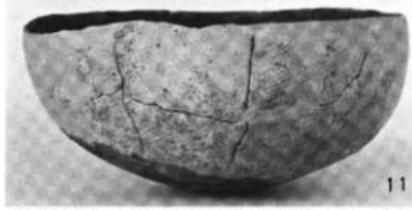
4



6

安満遺跡 方形周溝墓の土器群 (1 ~ 6)

(1) C=27.2, (2) h=23.3, (3) h=15.5, (4) h=30.6, (5) h=11.6, (6) h=16.9



安満遺跡 方形周溝墓の土器群(7~12)

(7) h=18.8, (8) h=19.2, (9) h=11.4, (10) h=10.0, (11) h=15.3, (12) C=15.3



13



16



17



14



18



19



15



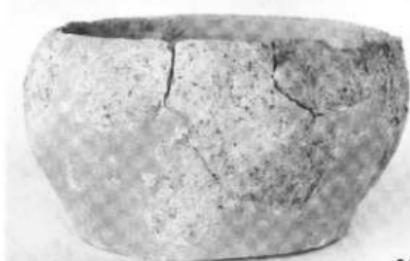
20



21

安満遺跡 包含層(13~21)

(13) h=15.2, (14) C=14.5, (15) h=13.1, (16) C=18.5, (17) C=24.2, (18) C=15.8, (19) C=12.9,
(20) C=11.7, (21) C=21.0



22



25



26



23



27



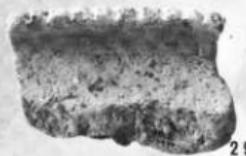
24



28

a. 安満遺跡 包含層 (22~28)

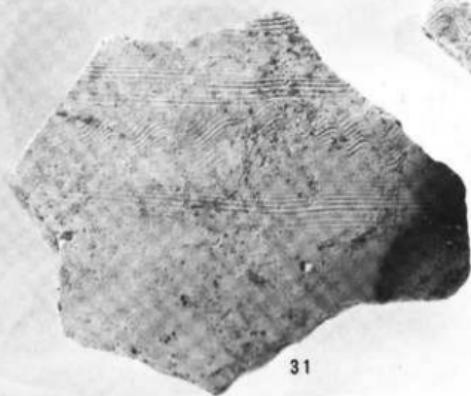
(22)C=15.5, (23)C=15.1, (24)C=14.3, (25)C=15.0, (26)C=14.9, (27)C=10.1, (28)C=10.5



29



30



31



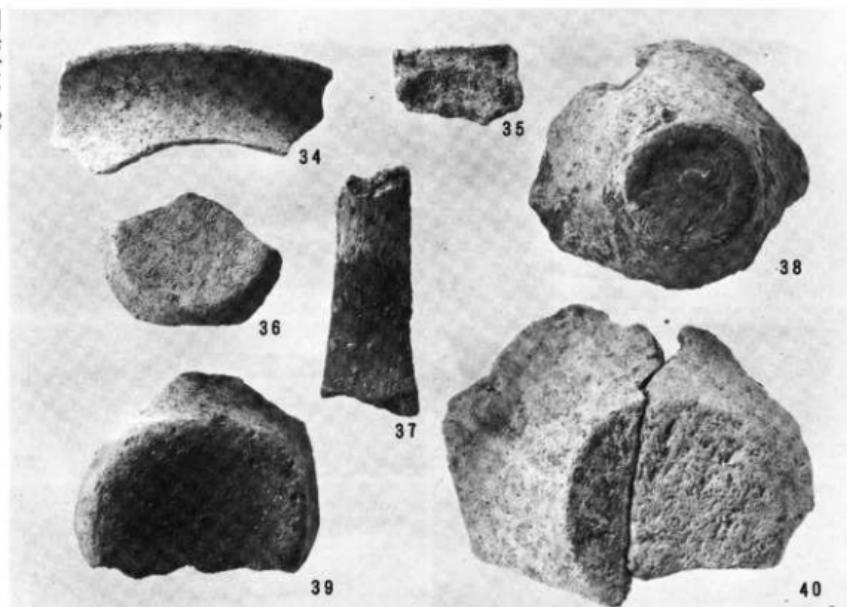
32



33

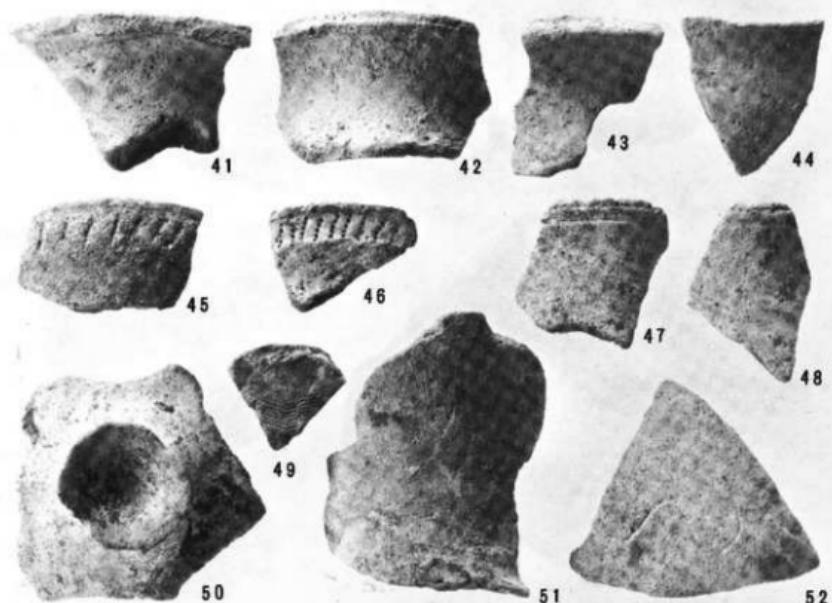
b. 安満遺跡 方形周溝墓の供献土器 (29~33)

約 1/2



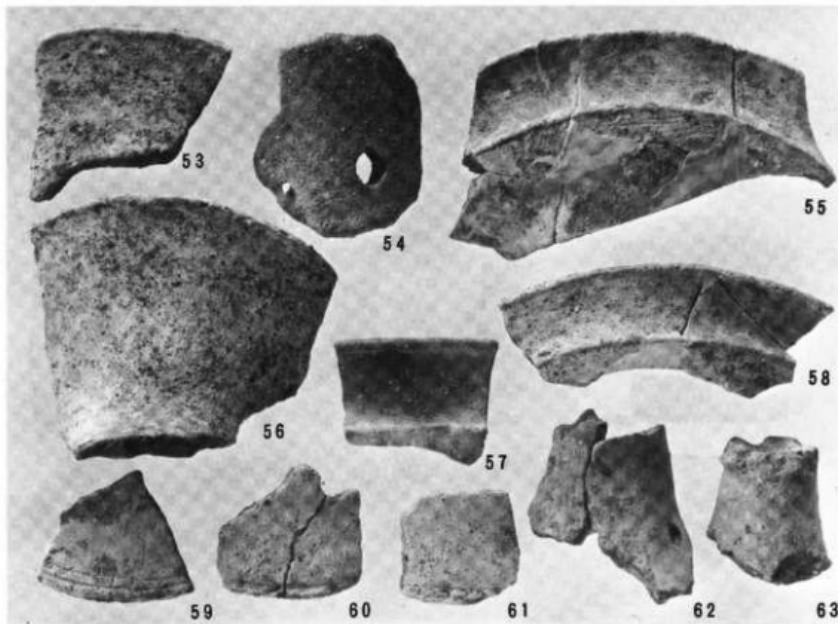
a. 安満遺跡 包含層 (34 ~ 40)

約 $1/2$



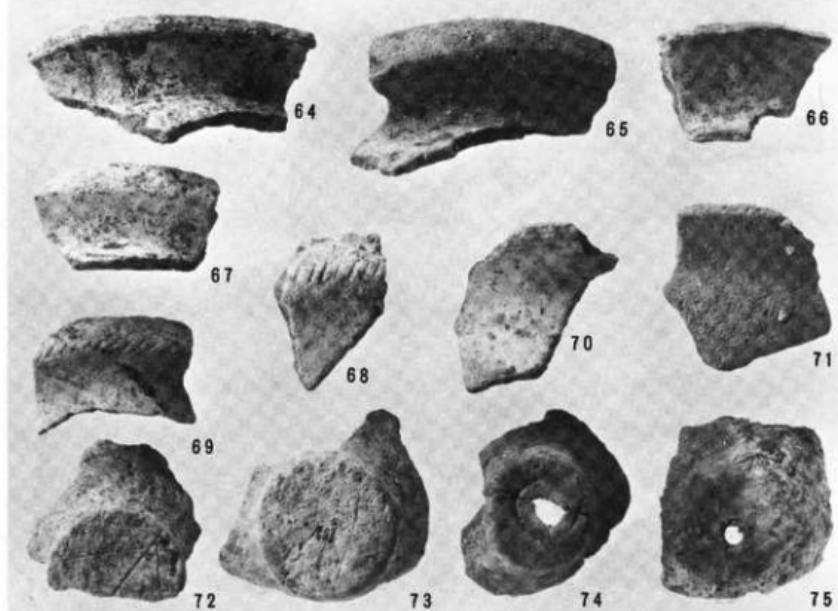
b. 安満遺跡 方形周溝墓の土器群 (41 ~ 52)

約 $1/2$



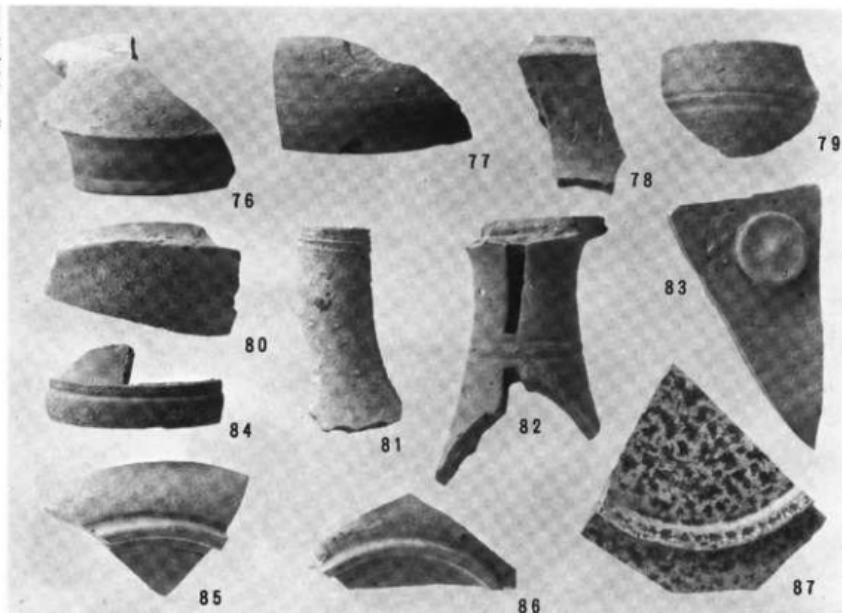
a. 安満遺跡 方形周溝墓の土器群 (53 ~ 63)

約 1/2



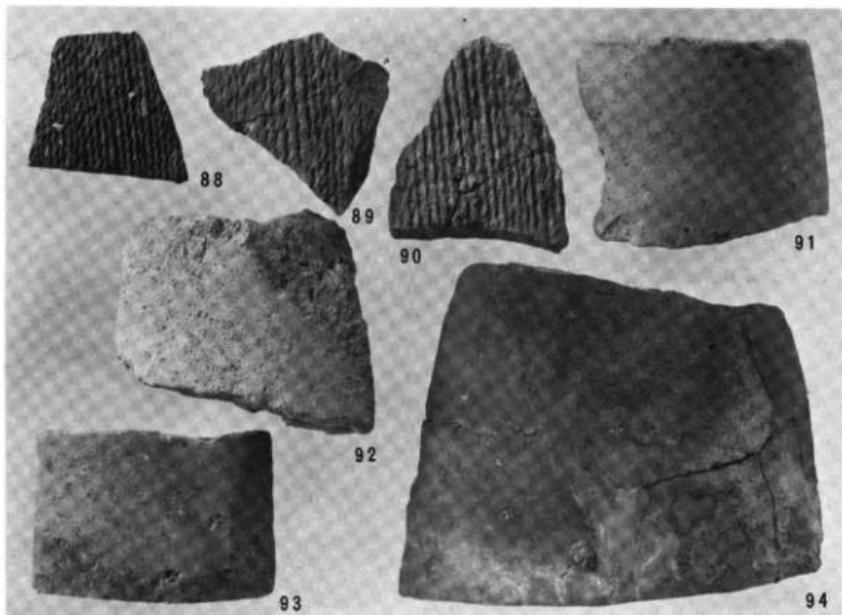
b. 安満遺跡 方形周溝墓の土器群 (64 ~ 75)

約 1/2



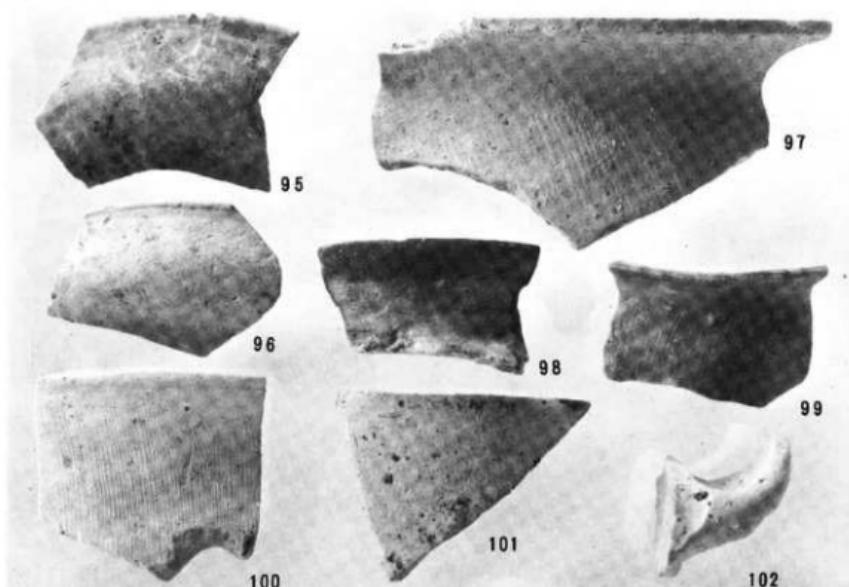
a. 安満遺跡 包含層 (76 ~ 87)

約 $\frac{1}{2}$



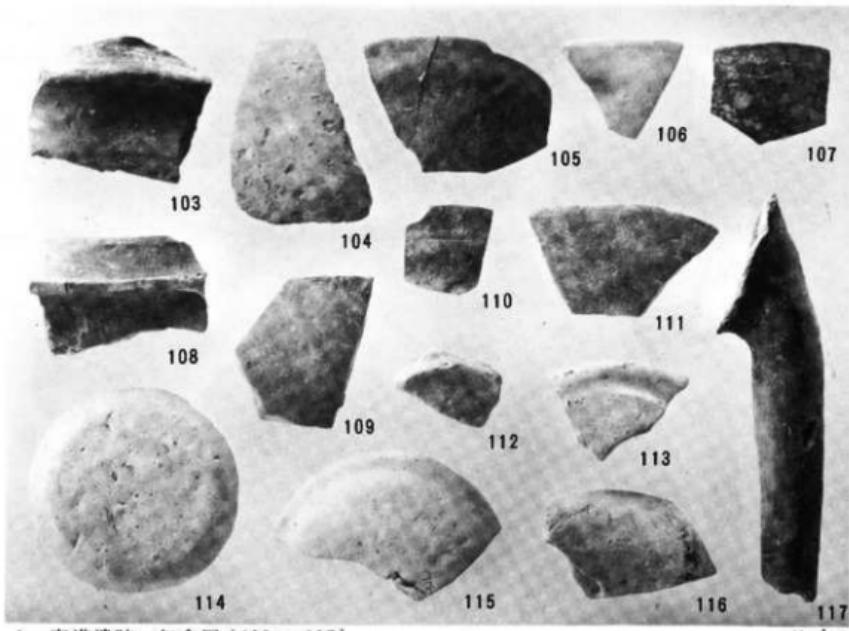
b. 安満遺跡 包含層 (88 ~ 94)

約 $\frac{1}{2}$



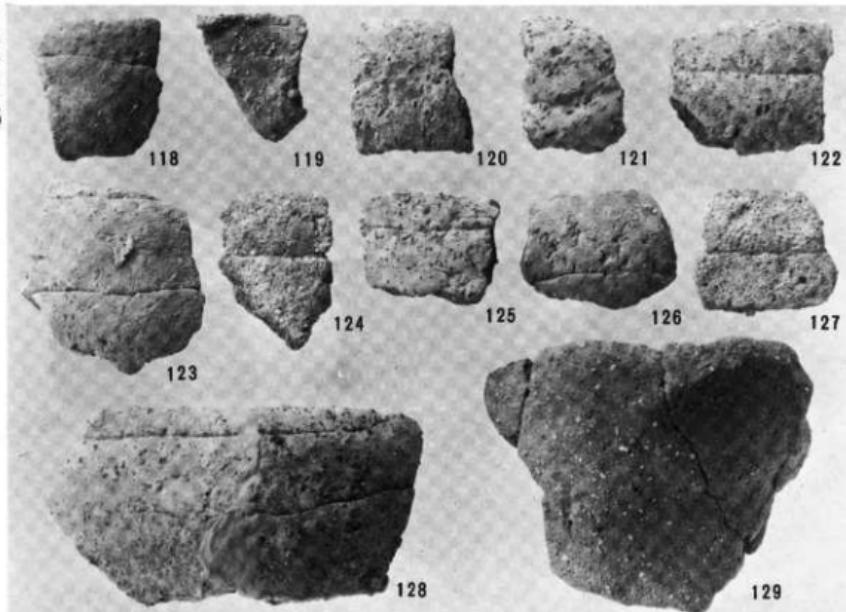
a. 安満遺跡 包含層(95~102)

約 1/2



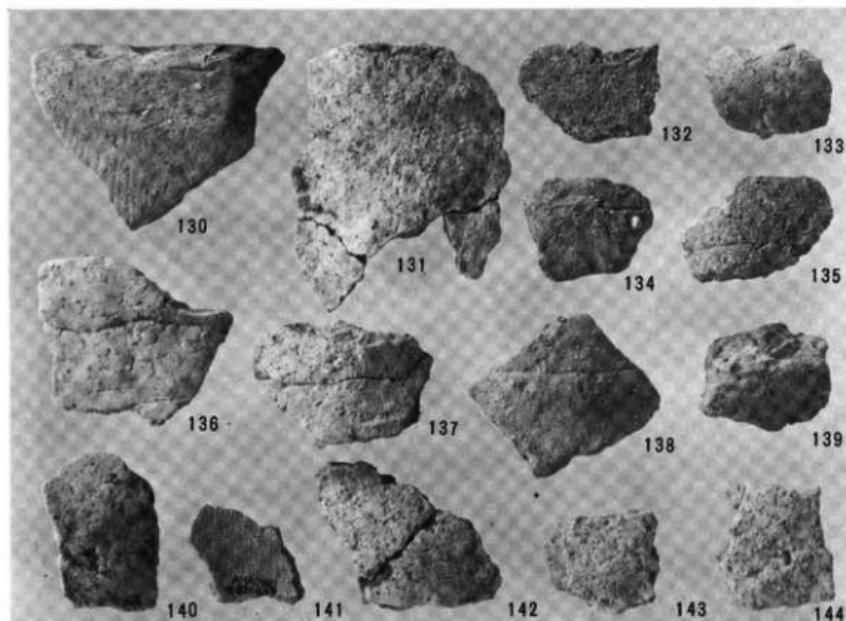
b. 安満遺跡 包含層(103~117)

約 1/2



a. 安満遺跡 包含層 (118 ~ 129)

約 $\frac{1}{2}$



b. 安満遺跡 包含層 (130 ~ 144)

約 $\frac{1}{2}$